

家庭における使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の一日:

アブドゥル=マリーク・アル=カーシム

はじめに

導きと真実な教えをもって、その使徒を遣わされた御方にすべての称賛あれ。

使徒たちの中の長であり、人類に慈悲として使わされた私たちの預言者と彼の教友たちすべてに平安がありますように。さて:

現在、大多数の人々は(預言者に対する敬慕について)誇張、あるいは怠慢な姿勢を取るかのどちらかにあります。彼らの中には、祈願を使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対して行い、また彼に加護を求めるなど、シルクの段階に到達するまで誇張して敬うことがありますーアッラーに御加護を求めますー。

また一方で、ある人びとは彼(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の導きに従うことに対して不注意であったり、彼を模範や理想の姿としては捉えなかつたりすることもあります。

この文書では一般者向けに、彼に関する伝記と日常生活について、簡易的に紹介するものであり、すべての事柄について陳述するものではありません。しかしながら、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安がありますように)に関する性質と徳について述べたいと思います。

またこの中では、人々の生活に欠けている側面にも焦点を当てて、

各項目ごとに2、3のハディースを紹介したいと思います。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の生活はダアワー(布教)や生き方においてウンマ全体に対する模範でした。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は至高なるアッラーに対しての服従や崇拝行為において、また寛容な品性と善き対人関係など広範囲に及ぶ最善の模範でした。

至高で偉大なるアッラーが彼(預言者)を称賛していることがその裏付けとしても十分と言えます:

本当にあなたは、崇高な徳性を備えている。

スンナに従う者たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の地位についてアッラーが彼等に命じられた規定通りの理解で受けとめて敬意を示します。彼(預言者)はアッラーの僕でありまたアッラーのみ使いでありアッラーの親友でもあります。そしてスンナに従う者たちは自分たちの子供や両親、または自分自身以上に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のことを愛しますが、決してその度合いを誇張したり過小したりせず正し理解で受け止めるのです。

それゆえに、私たちは誕生祭などのように新しいことを導入したりするのではなく、むしろ彼(預言者)が命じられたように預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を愛し、また彼(預言者)の命に従い、禁じられたことを避け防ぐのです。

その伝えられた知識の中には、彼(預言者)は一人の人間であること

また彼(預言者)は全人類におけるアッラーの最良の被造物であること

最後の預言者であり最も高貴であること

人々の間に光として現れること

シャハーダの中に至高なるアッラーと預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対する証言が含まれていること

ムアッズィン(礼拝の呼びかけ人)が一日五回アザーンをする際、証言の文言として含まれること

至高なるアッラーの名から預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に名が与えられ高貴な存在とされたこと

アッラーは称賛されるべき存在であり、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は称賛する者として(حمد)が使われていること

私たちがこの現世において愛する預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を見る機会を失った時、私たちは至高で偉大なるアッラーに預言者が以前、語られた者たちの一人となれるように祈願します:

本当に私は、私の同胞たちと会えることを願っています」人々は言いました:「み使い様、私たちはあなたの同胞ではありませんか?」預言者は言いました:「あなたたちは、私の友人です。私の同胞とは、まだこの世に生まれてない人たちのことです」人々は言いました:「み使い様、まだ生まれてもないあなたのウンマの人々を、どうやって識別なさるのですか?」するとみ使いは言われました:「ある人が、全身真黒の馬群の中に額と両足が白い何頭かの馬を所有している場合を想像してみなさい。その人には、自分の馬たちを識別できないだろうか?」人々は言いました:「確かにできます」み使いは続けてこう言われた:「彼らはウドゥーを行ったため、顔、両手、両足を白く輝かせながらやって来るのです。私は彼らより先に私の水場に到着しています。」

私は至高で偉大なるアッラーに私たちを預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に正しく従った者として、また彼(預言者)のスンナに倣った者としてもらえるようにドウアー(祈願)します。

また至高で偉大なるアッラーに私たちを預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と共に天国に入れるように、そして彼(預言者)に最善の報奨が授けられるようにドウアー(祈願)します。

私たちの預言者ムハンマドとその系譜、その教友全てにアッラーの祝福と平安がありますように。

アブドゥル=マリーク・ブン=ムハンマド・ブン=アブドゥル=ラフマーン・アル=カーシム

訪問

私たちは文字や単語を通して何世紀も前にページをめくり、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家を訪問して観察してみたいと思います。

彼(預言者)の家に入り彼(預言者)がどのように振る舞い、そして話すのかを見てみましょう。
私たちは僅か一日の時間を預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家で過ごすことで彼(預言者)の言動を通して数え切れない程の教訓を見出すはずで
また最近では情報の入手手段の発展に伴い人々が得る知識の量は増加しました。書籍や研究資料、映像や文書などを通して東西に及ぶ情報を入手することができます。
その中でも、シャリーア(イスラーム法)に則って預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を観察し、見聞から得た知識を純粹に取り入れ活かそうとしている点に於いて私たちにはよりその資格が備わっていると言えるでしょう。
またここでは簡潔に紹介することを目的とする為に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家に於ける特定の状況について焦点を当てるつもりです。それらの観察した内容が私たち自身を育成し、私たちの家に於いて実践に活かせるように願います。
親愛なるムスリムの兄弟姉妹の皆さん:
私たちは自分たちが見たことのないものを単に楽しむ為だけに何世紀も前に遡るわけではありません。
むしろ、私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の伝記を読むことによって、彼(預言者)のスナに従い、彼(預言者)が実践した方法でアッラーに対する崇拝行為に活かしたいと考えるのです。
至高で偉大なるアッラーは私たちにアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を愛するように御命じに
なされました。
そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対する愛を示す最も重要な印は、彼(預言者)の命令に従い、彼(預言者)が禁じたことを避け、守ることなのです。
至高で偉大なるアッラーは私たちに預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の命令に従い、彼(預言者)をウンマの長としてまた最善の模範とするように命じられました。
言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。」
そして、至高なるアッラーは仰せられました:
本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった。

至高で偉大なるアッラーはクルアーンの中で40箇所以上において預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の命令に従うように言及されました。そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に従うこと以外には来世での幸福と救済は実現しないことを示されたのです。
アッラーとその使徒に服従する者は、川が下を流れる楽園に入り、永遠にその中に住むであろう。それは至上の幸福の成就である。
だがアッラーとその使徒に従わず、かれの定めにくる者は、業火に入り、永遠にその中に住む。かれは恥ずべき懲罰を受けるであろう。
またアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を愛することは信仰の素晴らしさを見出す原因の一つに数えられます。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言われました:
「誰でも信仰の素晴らしさを見出した者は三つの特長をもっています。一つ目に、彼にとってアッラーとそのみ使いは他のいかなるものより尊いこと…」
また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:
「私があなた方の父や子、はたまた(その他)全ての者よりも愛しい者とならなければ、真に信仰したことにはならない。」
アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の伝記はよい香りを放つ純真なものであり、私たちはそれを学びその導きに従わなければなりません。

旅行

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家に旅をすることは彼(預言者)の生活の詳細や家族に対する振る舞い方など、特に私たちが至高なるアッラーからの善き報奨を求める上で学べるとも興味深い事です。
この旅行では、私たちの最善の模範(預言者)からの偉大な教訓を学ぶことができます。
しかしながら、この旅は書籍や教友たち(彼らにアッラーのご満悦あれ)の伝承を通じての旅を請け負うものです。なぜならば、実際に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の墓や家、または他の場所を目的とした旅行は許可されていません。ただし、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が言及された3つのマスジドだけは例外です。彼(預言者)は言われました:
「ハラーム・モスク、預言者モスク、アクサー・モスクの3つのモスク以外の場所を目的として旅立ってはならない。」
その為、私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の命令に従い、この3つのマスジド以外を宗教的な崇拝目的の為に旅行してはいけません。
至高で偉大なるアッラーは仰せられました:
また使徒があなたがたに与える物はこれを受け、あなたがたに禁じる物は、避けなさい。
同様に私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の痕跡を求めることも避けなければなりません。
イブン・ワッダーフは言いました:

かつて人々は樹の下で預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に忠誠を誓いました。ウマル・ブン・アル＝ハッターブ(彼にアッラーのご満悦あれ)はその(忠誠が誓われた場所である)樹を切り倒すように命じました。なぜならば人たちがその樹の下へ赴き礼拝を捧げるようになり、この樹自体が人々の間で特別視されることを恐れたからです。

またイブン・タイミーヤはヒラーの洞窟について言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は預言者性を授かる以前にヒラーの洞窟の中でアッラーに対する崇拜行為に勤しんでいました。そしてその場所において最初の啓示が下りましたが、啓示が下り始めてからのそれ以後、彼(預言者)も教友たちもその場所に登ることも近づくこともしなかったのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は預言者性を授かった後に10年以上をマッカで過ごしましたが、マッカの信仰者達と同様にヒラーの洞窟を訪れることも登ることもありませんでした。またマディーナにヒジュラ(遷移)した後、アル＝フダイビーヤのウムラ(小巡礼)やマッカ勝利の年に20日間近く滞在した時、またアル＝ジウラーナのウムラなど幾度となくマッカを訪れた際もヒラーの洞窟に行くことも訪れることもなかったのです。」

私たちが預言者の街マディーナに近づくとも最も卓越した目印が眼前に現れます。

それこそがウフド山であり、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

この山は私たちを愛し、私たちもこの山を愛しています。

そして私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家に入る前にその建物と外観を目にしますが、その住まいの小ささと簡素な家具類を目撃しても驚くことはありません。

なぜならば、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々の中でも最も禁欲であり、現世の楽しみや財産に目を向けることはなかったからです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言われました:「礼拝は私の目を喜ばせてくれる」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は現世について次のように言われました:

「私は現世について関心を向けることはない。現世を例えてみるならば、一人の乗り手が夏の暑い日に移動しているようなものであり、彼は木陰で暫しの休息をとりその後立ち去っていくようなものである。」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家へと近づき、私たちはマディーナの道を足早に進みます。

そして今、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の妻たちの部屋を目の前にすることが出来ました。いくつかの部屋はナツメヤシの茎に泥を混ぜたもので建てられており、また他の部屋は石を重ね、そして全ての部屋の屋根はナツメヤシの茎で覆われていました。

ハサン(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ウスマーン・ブン・アッファーン(彼にアッラーのご満悦あれ)がカリフを務めていた時に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の妻たちの家に入るとその屋根に私の手が届きました。」

実際にそれはとても質素な家であり、小さな部屋から成り立っていました。しかしながらその部屋は信仰心と至高なるアッラーに対する服従、そして啓示と教訓に満たされていました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の特徴:

今、私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家近づき、許可を求めて扉をノックします。彼(預言者)のハンサムな顔立ちや微笑まれている様子など彼(預言者)の特徴を知る上で、実際に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を見ている者と共にいるかのように私たちの想像を膨らませてみましょう。

アル＝バラウ・ブン・アーズィブ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は最も顔立ちが立派で、かつ最も容姿の優れたお方でした。彼の上背はとても高くはありませんでしたが、低くありませんでした。」

また彼(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の身長は適度にあり肩幅が広く、髪の毛は耳たぶまでに達するほど長くありました。また私は彼(預言者)が赤いマントを着ているのを見たことがあり、彼以上にハンサムな人物を見たことがありません。」

またアブー・イスハーク・アッ＝サビーイー(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある男がアル＝バラウ・ブン・アーズィブ(彼にアッラーのご満悦あれ)に尋ねました:“預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の顔は剣のよう(な輝き)でしたか?”すると彼は言いました:“いいえ、月のよう(な輝き)でした。”」

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の掌よりもなめらかな錦や絹に触ったことがないし、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の体から漂う芳香よりもよい香りをかいだことがありません。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の特徴: 羞恥心について

アブー・サイード・アル＝フドゥリー(彼にアッラーのご満悦あれ)も彼(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について述べています:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は寝室の乙女よりも羞恥心の強いお方でした。そして彼が何かを嫌っている時には、私たちはその表情からそのことを察することが出来たものです。」

これは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の美しい外見と彼(預言者)の品性についての特徴を簡易的に紹介したものです。至高で偉大なるアッラーは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を最も完全な人物とされました。

使徒ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の話し方:

以前、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はどのように話されていたのか、その話し方といくつかの特徴について見てみましょう。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はあなた方が今話しているように、急いで話されることはありませんでした。むしろ彼(預言者)は簡潔で明白に話され、聴衆が彼(預言者)から聞いたことを記憶できるほどでした。」

彼(預言者)は思いやりのある寛大な方であり、人々が彼(預言者)の言葉を理解することを好まれました。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は個人差や理解の程度の違い、また相手の能力なども考慮に入れて話し、それは時に忍耐を求められるものでもありました。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の言葉は、それを聞きたいかなる者も理解することが出来るような、(明瞭に)区切られたものでした。」

またアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の優しさについて目を向けると、彼(預言者)の心はともても広大で、人々が彼(預言者)の言葉を理解できるように繰り返し話されていました。

アナス・ブン・マールク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言葉を3度繰り返されその為、聴衆は正しくそれらを理解することができました。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々に親切に接し、彼(預言者)に対する恐れを取り除かれました。

イブン・マスウード(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「一人の男が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとに来て話しました。すると彼は畏れから震えはじめ、その様子を見て預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼に言いました。“落ち着きなさい。私は王ではありません。私は干し肉を食べていた女性の息子に過ぎないのです。”」

家の中

許可を得てこのウンマの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家の中心に入ることが出来ました。

ベッドや家具、道具類と同じように、内側からこの(預言者の)家のことについて語ってくれる教友たち(彼等にアッラーのご満悦あれ)の話に耳を傾けてみましょう。

通常、他人の部屋や家全体を見回すことは禁止されることを知っています。しかしながら、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちの模範であり、この家を観察することによって、彼(預言者)に従うことに役立てればと思います。

実際、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家の家具は質素であり、その中心を占めるのは信仰心です。

今日、多くの家々に於いて壁に生物画が飾られているのとは対照的にこの家でそれを見ることはありません。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「天使は犬がいる家には入らないし、画のある家にも入らない」

それからアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が日常で使用していたものを見てみたいと思います。

サービト(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アナス・ブン・マールク(彼にアッラーのご満悦あれ)が鉄の線の入った厚みのある木製の容器を私たちの所に持ち出してきました。そして彼は言いました:“サービトよ!これはアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の容器ですよ。”」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこの容器で水やナビーズ、蜂蜜やミルクを飲まれていました。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使いはお飲みになる際は三呼吸で飲まれるのが常であった。

この意味は:器の外で呼吸すること

また預言者は容器の内側で呼吸すること、もしくは息を吹きかけることを禁じられました。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が戦いの時に装備していた鉄の鎧については、おそらく今は家の中にないでしょう。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)がアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が亡くなり彼(預言者)が使用していた鉄の鎧はユダヤ人のもとにあると言われたように、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は30サーアの大麦を受け取る担保としてそれをユダヤ人に渡しました。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は妻たち(彼女たちにアッラーのご満悦あれ)のもとを突然訪れて彼女たちに不信感を抱かせるようなことはありませんでした。むしろ彼(預言者)は自身が訪れることを彼女たちが周知しているときに訪れ、また訪問時には彼女たちに挨拶をされました。

また以下にあるアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のハディースを注意深く考えてみて下さい。

「幸福とはイスラームに導かれた者であり、また彼(もしくは彼女)が生活に必要な糧を与えられて満足していることである。」

また他のハディースの例にも耳を傾けてみて下さい。

「誰であれ家族が平穩無事であると感じ、健康な状態で朝を迎え、その日に必要な糧を授かっている者は、あたかも全世界を手に入れたようなものである。」

親戚

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々の中でも最も親戚関係の繋がりを良く保たれる方でした。

信仰者ではないクライシュ族の人々でさえ、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が啓示を受ける以前から彼(預言者)の正直で誠実な性質を称賛するほどでした。

ハディージャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について次のように言及しています:

「あなたは親戚関係の繋がりを良く保ち、真実を話される方です...」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が最も重要な責務の一つとして果たすべく、7歳の時に亡くした母親の墓を訪れた時の事を見てみましょう。

「アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)はこう言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はその御方の母の墓をお訪ねになった。そしてその御方は泣かれた。周囲にいた人達も泣いた。その時「私は、わが主に母のためにお許しを懇願したがお聞き入れにはならなかった。また私は主に、わが母の墓を訪れることを願った。それはお聞き入れ下さった。それであなた方も墓地を訪れよ。実にそれは亡き人々のことを思い出させる」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の親戚に対する愛情、そして苦痛や困難に見舞われても彼等に呼びかけ、導き、業火からの救済のために奮闘されたことについて考えてみて下さい。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「次の聖句が啓示された折:

「あなたの近親者に警告しなさい」(クルアーン第26章214節)

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はクライシュ族の者らと呼ばれた。それで彼らが集まった時、彼はイスラームに関する基本的な事柄と或る部族を例にした特別な話をなされた。彼は言われた:

『アブド・シャムスの子孫よ、地獄から自らを救いなさい、カアブ・ビン・ルウィーの子孫たちよ、業火から自らを救いなさい、ムツァ・ビン・カアブの子孫よ、業火から自らを救いなさい、アブド・マナーフの子孫よ、地獄から自らを救いなさい、ハーシム家の子孫たちよ、業火から自らを救いなさい、アブドル・ムツァリブの子孫よ、業火から自らを救いなさい、ファーティマよ、業火から自らを救いなさい。私はあなたたちの親族であるが、アッラーの定めに従ってまで、あなたたちを守る力は私にはありませんから』

親愛なる預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼(預言者)の叔父であるアブー・ターリブに対して諦めたり疲弊することなく、何度も繰り返し彼が死を迎えるその日までイスラームを受け入れるように呼びかけました。

アブー・ターリブの臨終に近い頃、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼を見舞いにおいでになった。そこには、アブー・ジャフル・アムル・ビン・ヒシャームとアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤ・ビン・ムギーラがいた。預言者はこう言われた:

「伯父上よ、『アッラー以外に神はない』と告白して下さい。そうすればあなたが信者であることをアッラーの前で私が証言します」

これに対しアブー・ジャフルとアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤは言った:「アブー・ターリブよ、あなたは父アブドル・ムツァリブから受け継いだ先祖伝来の信仰を棄てるのですか」

彼ら(アブー・ジャフルとアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤ)はアブー・ターリブが最後にアブドル・ムツァリブの信仰を守ることを決断するまで、彼らの言葉を繰り返した。

これに対しみ使い(彼の上に平安がありますように)は言われた:

「アッラーよ、私はあなたが止めるよう命ずるまで、あなたに伯父のための許しを乞い続けるでしょう」その後間もなく、アッラーは次の聖句を啓示された:

多神教徒のために、御赦しを求めて祈ることは、仮令近親であっても、かれらが業火の住人であることが明らかになった後は、預言者にとり、また信仰する者にとり妥当ではない。

次の聖句もアッラーのみ使いに啓示された:

本当にあなたは、自分の好む者(の凡て)を導くことは出来ない。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は叔父の生前に何度も繰り返しイスラームを受け入れるように呼びかけました。それは死の床に至り啓示が下るまで彼に対する赦しと慈悲を乞い求めたのです。

そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は啓示を受けるとそれに従い、親戚の中で偶像を崇拝する者たちの為にドゥアー(祈願)することをやめました。

この内容は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のウンマに対する慈悲と配慮を表しており、また最終的にはたとえ親戚や血縁関係の間柄であったとしても信仰しない者や多神崇拝をする者とは無縁であることを示しています。

私たちの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は絶望の後に現れ

一人の使徒として、偶像が崇拜されている地上に遣わされました
彼(預言者)は眩い光を放って人々を導き
磨き上げられた剣の光沢のように現れました
私たちに地獄の業火について警告し、天国の吉報を伝え
そして私たちにイスラームを教えたのです。アッラーにこそ称賛あれ。
家庭におけるアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)
家庭での様子は人間のよき品性や道徳心など本来の姿を真に現すものです。また彼のよき交際関係や純真な性格
が現れたりします。家庭での様子は部屋や壁に遮られ、誰も見ることが出来ません。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼(預言者)の僕や給仕、また妻たちに対して尊大に振る舞うことなく謙虚さと寛容さをもって接していました。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこのウンマの指揮官であり指導者でした。彼(預言者)がどのように家庭で振る舞っていたのかを見てみたいと思います。
アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は尋ねられました:「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は家の中で何をなされていたのですか？」
すると彼女は言いました:「彼(預言者)は他の人と同じように振る舞っていました:彼(預言者)は衣類から虫を取り除き、羊のミルクを搾り、そして彼(預言者)自身の仕事を行っていました。」
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は謙虚な姿勢で振る舞い、高慢さや他に負担を課すことをされないう一つのお手本でした。彼(預言者)は人類の中で最善であり率先して手を差し伸べ、全てのことに於いて献身的に振る舞いました。そして彼(預言者)はこの祝福に溢れた家の中に居りましたが、度々預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)自身の空腹を満たすものを見つけることはできませんでした。
アン=ヌウマーン・ビン・バシール(彼にアッラーのご満悦あれ)は次のように言いました:
私は、かつて、あなたたちの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が、腹を満たすために食べるべき、なつめやしの質の悪い実すらも入手できなかったのを見たことがあります」
アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:
「私たち家族は1ヵ月間(料理の為に)火をつけることなく過ごしました。そして私たちの食べ物にはナツメヤシと水以外にはありませんでした。」
それにもかかわらず、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はイバーダ(崇拜行為)とアッラーの命令に服従することにおいて気持ちを取り乱すことはありませんでした。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はアザーン(礼拝の呼びかけ)を耳にした時には敏速に反応し、現世的な事柄から身を退きました。
アル=アスワド・ブン・ヤズィード(彼にアッラーからのご満悦あれ)は言いました:「私はアーイシャ(彼女にアッラーからのご満悦あれ)に尋ねました:“預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は家の中で何をなされていたか?”」
彼女は言いました:「彼(預言者)は家族の為に手伝い、アザーン(礼拝の呼びかけ)が聞こえると(礼拝の為に)出て行かれました。」
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が自宅で義務の礼拝を行ったという伝承は、死が訪れる前に病気が激しく熱病にかかり、外出が困難であった時以外には伝えられていません。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はウンマの人々に対して慈しまれますが、集団での義務の礼拝を行わない者に対しては厳しい態度を取られました。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:
「私は誰かにまきの束を準備するよう命じそれから誰かに人々を導いて礼拝するように命じておいて、その後礼拝に加わらない人々の家をその中に居る人間も含めて全て焼き払ってしまおうかと考えた程でした」
これは集団での礼拝の重要性を示すものです。
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:
「誰であれアザーン(礼拝の呼びかけ)を耳にして応えない(集団礼拝の為にマスジドに行かない)者は理由がない限り礼拝をしたことにはならない。」
理由には恐れや病気などがあります。
今日、礼拝する者たちはどこにいるのでしょうか?妻たちの隣に座りマスジドに行くことはしません。病気や恐怖に関する理由はどこにあるのでしょうか?
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の導きと振る舞い
人の動静は彼の知性と彼の本質を知るための鍵です。
信仰者たちの母であるアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に近い存在であり、彼(預言者)の品性や就寝時の様子、起床時、病床時、健康時、怒りや満足などあらゆる状況での預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について最もご存知の御方です。
信仰者達の母であるアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は決して市場で無作法で劣悪で騒々しい振る舞いをされる方ではありませんでした。また決して悪事に対して悪事で報復されることはなく、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人を赦し寛容に振る舞われていました。

これはアッラーがこのウマナに対し慈悲と恩恵として遣わされた預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の性質です。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の孫であるアル＝フセイン(彼にアッラーのご満悦あれ)は彼(預言者)について言及しています：

「私は私の父に人々が彼と集まっていた時に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の品行について尋ねました。すると彼は言いました：

“預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は常に快活で落ち着いており、人に寛大な方でした。彼(預言者)は決して無作法で厳しく、また騒々しく話されることはなく、他人の不正をあら捜しされることもありませんでした。彼(預言者)は過度に称賛されることを嫌い、過度におどけたりすることもなく吝嗇な性質でもありませんでした。彼(預言者)は自ら好まないものを大目に見、期待した人物に失望することも彼を非難することもなく、誰に対しても見下げたり非難したり、また彼等の失敗を追跡したりすることもありませんでした。彼(預言者)は彼等にとって善き報奨になることを望まれて話されました。彼(預言者)が話をされる時には頭上に鳥が止まっているかのように聴衆は頭を下げて聞いていました。そして彼(預言者)が話されている時に聴衆は静かに耳を傾け、彼(預言者)の話が終われば人々は話をするのでした。人々は彼(預言者)の前で口論をしたりはしませんでした。人々が笑っている事柄に彼(預言者)は共に笑い、人々が驚く事柄に対して共に驚いたりするのでした。”

彼(預言者)は見知らぬ不法な者に対してもよく辛抱し、教友たちに言いました：

「助けを必要としている者を見た時には援助してあげなさい。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人から過度に称賛されることをひどく嫌われました。そして人が話すのを妨げたり、話の途中で彼(預言者)が話し始めたりすることはありませんでした。ただし、人が過度に話し続けた時だけは止めに入るか、もしくは諦めて立ち去ったのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の性質や彼(預言者)の振る舞いの一つ一つを注意深く観察してみてください。なぜならば、それらの一端でも取り入れその行いに努めることは、よき行いの具現化であるからです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼(預言者)と共にあった者たちに宗教に関する事柄について教えられていました。

その中には、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が次のように言われたものがあります：

死ぬまでアッラー以外の何かにドウアー(祈願)していた者は、地獄の業火に入るだろう。

また、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は次のように言いました：

言葉によってでも、手によってでも他人を平安にする人がよいムスリムです

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「暗闇の中、マスジドに赴く者たちに良い知らせを伝えなさい。彼らは審判の日に完全な光を与えられるだろう。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「あなた方の財産、身体、言葉を用いて多神教徒に対し奮闘しなさい。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「しもべは、その話す言葉によっては、たとえそれがどんな影響をもつか知らなかったとしても、東西間よりももっと遠い距離にある地獄におちることになる。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

“私は呪う者として遣わされたのではない。慈悲として遣わされたのだ。”

ウマル(彼にアッラーのご満悦あれ)によれば、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「キリスト教徒がマルヤムの息子を誇張して称賛したように私を称賛してはならない。」

الإطراءとは：一定の程度を越えた称賛のことを指します。

ジュンダブ・ブン・アブドッラーは言いました：

私は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が死の五日前に次のように言ったことを聞きました：

「私があなた達の中からハリール(親友)を選んだとしてもアッラーの前で潔白です。なぜならアッラーはイブラヒームをハリールにしたと同じように私をハリールにしました。もし私が私の信徒たちの中からハリールを選ぶとしたら、きっとアブー・バクルを選ぶでしょう。かつてあなた達以前の人々は彼等の預言者の墓を礼拝所にしましたがあなた達は決して墓を礼拝所にしてはならない。私はそのことをあなた達にしかと禁じます。」

このようにマスジドの中に墓が一つもしくは複数あった場合、そこでの礼拝は禁じられます。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘たち

イスラーム以前の無明時代に女兒が産まれることは両親の人生にとって災難でした。それは家族や部族全体にまで影響を及ぼし、醜聞や恥となることを恐れ、その解決策としてこの社会の人々は女兒たちを生き埋めにしたので

す。彼等はこの恐ろしく残酷な行為を慣行しました。そこには慈悲や愛情の影すらなく娘たちは様々な手法で生き埋めにされたのです。

その例として、もし誰かが女兒を出産した場合に6歳になるまでそのままにしておきます。そしてその年齢を迎えた時に男が彼女の母親に言います：

「彼女を親族のもとに連れて行く。彼女を飾り付けなさい。」しかし彼女の父親は彼が砂漠に掘った穴の墓場へと連れて行きます。そして幼い女兒に言います：「穴の中を見てごらん。」

女兒がそのようにすると、彼は女兒を墓の中へと押しやり、残酷にも女兒を砂で覆うのでした。

この無知な社会の慣習をアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこの偉大な教えによって断ち切りました。そこでは女性が母親として、妻として、娘や姉妹、または叔母としての名誉ある地位を得たのです。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘たちは彼(預言者)にとっても愛されていました。預言者の娘であるファティマ(彼女にアッラーのご満悦あれ)が彼のもとを訪れた時には、彼は彼女の為に起き上がって歓迎し、彼女の手に接吻しました。そして彼が座っていた場所に彼女を座らせたのです。また同様に預言者が彼女のもとを訪れた時には、彼女が彼の手に接吻し、彼女が座っていた場所に彼(預言者)を座らせました。

このように預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は娘たちのことをとても愛していましたが、以下の啓示がアッラーから齎され二人の娘であるウンム・クルスームとルカイヤがアブー・ラハブの息子であるウトバとウタイバから離婚されることになった時には預言者は辛抱強く、アッラーの為にその状況を受け入れました。

アブー・ラハブの両手は滅び、かれも滅びてしまえ。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はダアワーを断念すること、撤回することを拒みませんでした。クライシュ族の者たちが脅迫し、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘二人を離婚するに至っても堅固に忍耐し続けました。この教えを伝えることにおいて揺らぐことはなかったのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘たちへの真心を込めた歓迎について、アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています：

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の妻達が(彼の最後の病気のときに)彼のもとに(集って)いたが彼女達の誰もその場を離れようとしなかった。そこへファティマが歩いてやって来た。そして彼女の歩く姿はアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が歩く姿と全く変わらなかった。そして彼が彼女を見たとき彼は彼女を歓迎して「良く来た、我が娘よ」と言った。それから彼は彼女を彼の右側もしくは左側に座らせた。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘たちへの優しさと愛情について：預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼女たちを訪問して、彼女たちの様子を知り、そして彼女たちの抱える問題を解決しました。

ファティマ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとにひきうすから落ちた穀物を手にしなから仕事が多いことを訴え、召使いを探してくれるよう頼むために訪れました。しかしながら預言者は不在だった為、彼女は、アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)に会い、生活の困難さについて話しました。そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が帰った時、アーイシャはファティマが訪ねてきたことを話しました。

アリー(彼にアッラーのご満悦あれ)は付け加えてこう言いました：

預言者は、私たち(ファティマとその家族)の家においでになりました。私たちはベッドで横になっていましたが、預言者がおいでになったので起きようと思いました。すると預言者は言いました：「そのままベッドにいなさい。」そして私たちの間にお座りになりましたが、私の腹にさわった預言者の足は冷えきっていました。そしてその折、預言者は次のように言われました：

「私があなたたちに召使いよりも、よいことを教えてあげよう。ベッドに臥した時、アッラーは偉大なり！(タクビール)を34回、アッラーを讃美します！(タスビーフ)を33回、そして、アッラーを讃え、感謝します！(タフミード)を33回唱えなさい。その方が召使いをもつより、あなた方にとってずっとよいことである。」

私たちは、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の忍耐の中によき模範を見出すことが出来ません。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の子供たちはファティマ(彼女にアッラーのご満悦あれ)を除いて、預言者の存命中にすべて亡くなりました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はその人生の中において自身の顔を打つことも、服を裂くことも、また子供が亡くなった際にその死を悲しみ、集まりの場を設けて哀悼の言葉を受けたりすることはありませんでした。むしろ、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は忍耐して、アッラーの定命を満足して受け止めたのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちに素晴らしい助言と真正なハディースを残してくれました。それは悲しみや苦痛を和らげてくれます。

預言者ムハンマド(彼の上に平安がありますように)は次のように述べています：

災難に遭うと、「本当にわたしたちは、アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります。」(クルアーン第2章156節)アッラーよ、どうか私の災難に償いを、そして(失ったものの)代りにより良き物をお与え下さいと祈願すれば、アッラーはその者の災難を償われ、(前のもの)より良きものをお与え下さるであろう。

至高で偉大なるアッラーは災難に見舞われた者たちがこれらの言葉によって立ち直り、また忍耐する者たちがアッラーの御許で偉大な報奨を授かることの吉報を伝えたのでした。至高なるアッラーは仰せられました：

よく耐え忍ぶ者は本当に限りない報酬を受ける。

妻への接し方

家庭の中での妻の存在はとても重要な位置づけにあります。それはまるで大きな樹にある木陰のようにそこに住む者たちに平安をもたらすのです。

使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「現世は享樂であるが、現世の享樂の内でも最たるものは敬虔な女性である。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は妻たちに対してとても親切に振る舞いました。その例として、彼(預言者)は信仰者達の母である妻のアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)に対して親しみを込めて呼びかけ、彼女に知らせを伝える時には心が舞い上がるよに伝えたのでした。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「ある日、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「アーイシャよ、ここでジブリールがあなたに挨拶しています」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は最良で最も高貴な人物であり、また寛大で親切な方でした。彼(預言者)は妻たちの心理を理解したうえで思いやりをもって彼女たちと接していました。全ての女性が夫のもとでは他の女性以上に愛されていることを求めるように預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼女たちに敬意をもって振る舞われていたのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

月経中、水を飲むために私が使っていた容器を預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)にお渡しすると、預言者は、私が口を触れたところに御自分の口を当てて水をお飲みになった。私が月経の折、骨つき肉を食べ、残りを預言者にお渡しすると、預言者は、私の口が触れたところに御自分の口を当ててその残りをお食べになった。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は偽信者や東洋学者たちの誤った主張に反し、妻たちに対してはとても親切で思いやり深かったのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある日、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は妻たちの中の一人に接吻し、ウドゥー(小淨)をやり直すことなくサラ(礼拝)に出かけられました。」

またアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は多くの場面の中で、彼(預言者)の人生における女性の地位の高さについて明らかにされていました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はアムル・ビン・アース(彼にアッラーのご満悦あれ)から質問を受けた際、妻に対する愛情を明確に伝えました。これは恥じる必要のない正しいことです。

アムル・ビン・アースはアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が次のように言ったと伝えています:

「あなたにとって誰が最愛なる人ですか？」(と尋ねられ)彼は「アーイシャだ」と言いました。

また誰であれ夫婦の幸せを求める人たちは、信仰者達の母であるアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)がどのように預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と共に過ごしたかを注意して見るべきでしょう。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「以前、私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と共に一つの容器を使ってグスルをしていました。」

またこのウンマ(共同体)の預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は全ての事柄において、それが合法である限り妻を喜ばせる機会を逃すことはしませんでした。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「私が、まだ若く(体重が)軽かった頃に預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と旅に出かけました。その中で、彼(預言者)は人たちに言いました:“あなたたちは、先に行きなさい。”それから預言者は(私に)言いました:

“(アーイシャよ)こちらに来なさい、競争しよう。”その時、私は預言者と競争して彼(預言者)に勝つことが出来ました。

それから暫くの間、私と彼(預言者)は競争することはありませんでしたが、私の体に肉が付いた頃に彼(預言者)と旅をすることがありました。彼(預言者)は人たちに言いました:“あなたたちは、先に行きなさい。”そして彼(預言者)は言いました:“(アーイシャよ)こちらに来なさい、競争しよう。”そして私たちは競争し、(この時)私は預言者に負けてしまいました。すると預言者は笑って言いました:“以前の分、今回は勝ちました”と。」

それは実に思いやりのある冗談であり、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)についての格別に興味深い出来事でした。妻と競争し彼女の心に喜びを与えるために人々を先に行かせました。そして彼(預言者)は過去の出来事を織り交ぜた冗談を言うのです:「以前の分、今回は勝ちました」と。」

今日、この広大な大地において誰であれ預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の生き方を注意深く観察した者は驚かされるはずで。彼は預言者であり、勝利の指導者であり、またクライシュ族そしてハーシム家の末裔であり、偉大な戦勝軍を率いた指揮官でもありました。またこれに加えて、彼(預言者)は妻たちに対しては情の深い優しい人物だったので。

軍隊を統率し、長旅での戦いで勝利を収めたとしても預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は同行した弱い立場にある妻たちのことを決して忘れることはありませんでした。険しい道のりと長旅での疲労を取り除くために預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は哀れみや思いやりのある振る舞い方で彼女たちに接していたのです。

アル=ブハーリーの伝承の中で、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はハイバルの戦役から戻らる際に、サフィーヤ・ビント・フヤイ(彼女にアッラーのご満悦あれ)と結婚されました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はラクダの背こぶに彼女を覆う為の衣服をかけ、ラクダの横に跪いてサフィーヤが彼(預言者)の膝を使ってラクダに乗れるようにされました。

この印象的な光景は、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の謙虚さを表しています。

戦勝軍を率いた指揮官であり、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)であり、至高で偉大なるアッラーから遣わされた彼は、側にいる家族に対して自らを低くすることや妻たちに謙虚な姿勢で接すること、また彼女たちを助け喜びを与えることは、決して彼等自身の品位を下げるものではないことを教えられたのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の遺言より:

「女性に対する振る舞いは親切にしない…」

一夫多妻

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は11人の女性と結婚し、彼女たちは名誉ある信仰者達の母という名称を与えられました。また彼(預言者)が逝去された際には9人の妻たちがいました。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は高齢の女性や未亡人、離縁した女性や体の弱い女性たちと結婚しました。その中で唯一、アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)だけが処女だったのです。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は信仰者達の母と結婚をし、そして模範としての公正さを示しました。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は旅をされる前にくじを引き、それで選ばれた(妻の)一人を旅に同行させました。また彼(預言者)は生前、それぞれの妻と(平等に)一昼夜を過ごされていました。」

また、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の公正さについてアナス・ブン・マリック(彼にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は、九人の夫人を娶っておられた。預言者は、それら夫人の家に滞在する日数を平等に分割なさったので、最初に泊った夫人の家での順番は、九日後でなければ回ってこなかった。彼女らは、毎晩、順番に預言者が訪れる夫人の家に集まる習慣であった。

アーイシャの家に預言者がこられた日、ザイナブもきていた。この折、預言者は、間違っ、ザイナブの方に手を差し出されたが、アーイシャが「彼女はザイナブです」と叫んだので、(あわてて)手をおひきになった。

これは偉大な預言者の家の中での出来事であり、至高なるアッラーの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対する正しい導きがなければ、成功には至らなかったものです。

その為、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は主に対して言行でもって感謝しました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は妻たち(彼女たちにアッラーのご満悦あれ)に対して至高で偉大なるアッラーの命に従うようにイバーダ(崇拜行為)へと促し、また彼女たちを手助けしました。至高なるアッラーは仰せられました:

またあなたの家族に礼拝を命じ、そして(あなたも)、それを耐えなさい。われはあなたに御恵みを求めない。あなたがたに恵みを与えるのはわれである。善果は主を畏れる者の上にある。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は夜通し礼拝したものでしたがその時私は彼とキブラの間で寝ていました。そして彼がウイトル(一または三の奇数ラカートの礼拝)の礼拝をする時には私を起こしたので私もウイトルの礼拝をしました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は夜半の礼拝に立つことをムスリムたちに推奨されました。夫が寝ているときには妻が夫の顔に軽く水をかけ、また妻が寝ているときには夫が同様に言うなど夫婦が互いに協力して夜半の礼拝に立つように促したのです。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

“ある男が夜半に起き上がって礼拝を行い、それから妻を起こして彼女も礼拝を行う。もし彼女が拒んだら夫が妻の顔に軽く水をかけてあげる。アッラーがこのような男性にご慈悲を授けられますように。またある女が夜半に起き上がって礼拝を行い、それから夫を起こして彼も礼拝を行う。もし彼が拒んだら妻が夫の顔に軽く水をかけてあげる。アッラーがこのような女性にご慈悲を授けられますように。”

また真のムスリムは、外に現れている部分にも注意を払い、また内面においても純真さと清らかさを兼ね備えているべきです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は純真な心の持ち主であり、躰を清潔に保って良い香りを放たれていました。そしてスワークの使用を好まれそれを人たちに推奨されたのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「もし、私のウンマの者たちに負担でないならば、私は彼らに礼拝の度毎にスワークを使うよう命じたいと思う」

フザイファ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使いは、夜起きる毎に、いつも爪楊枝(シワーク)を使って口中を清潔になさった。

ミクダーム・ビン・シュライフは、言いました:

私はアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)に尋ねました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が家に帰って最初になさることは何でしたか？」すると、彼女は「預言者は先ず爪楊枝(シワーク)をお使いになった」と答えました。

清潔さを保ち、家族に会う前に身だしなみを整えるとは何と素晴らしい事でしょう。

預言者(アッラーからの祝福と平安あれ)は家に入る時には、次のように言いました:

『アッラーよ、アッラーの御名において私たちは入り、アッラーの御名において私たちは出ました。そして私たちの主に全てをお任せしました。』こう言って、それから家族に挨拶をしました。」

家族にもとに入る際には、清潔さを保って挨拶を交わし家族を喜ばせてみて下さい。

またムスリム兄弟の皆さん、これとは逆に咎めや非難、叱責などはしないで下さい。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のユーモア

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は指導者でありウンマの諸問題や軍事、家族と同様に時に啓示を受け崇拜行為や他の関心事にも従事していました。実にそれは偉大な仕事であり、どの人物であれ生活の中で要求されること全てを満たし滞りなく行うことは不可能なはずです。

しかしながら預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は全ての人々の受けるべき権利を満たしました。様々な立場の人たちが受けるべき権利を蔑ろにされることなく等しく享受したのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)には多くの責任と務めがあったにもかかわらず、心の中では子供たちに対する配慮も忘れていませんでした。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は子供たちと冗談を言って彼等と心を通わせたり、時に大人と冗談を交わすようにして子供たちを喜ばせたのです。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：

「人々はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に言いました：“アッラーのみ使いよ、あなたも私たちと冗談を言われるのですね。”すると彼(預言者)は言いました：

“そのとおり、しかし私は真実以外は口にしません。”」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の冗談についてアナス・ブン・マリーク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼に言いました：「やあ、2つの耳の持ち主よ！」

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：

「ウム・スレイムの息子はアブー・ウマイルと呼ばれていました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼が来た時にはよく冗談を交わしていました。ある日、彼が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとに来ました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼に冗談を言って笑わせようとしたのですが彼が悲しんでいる様子に気が付きました。そして彼(預言者)は言いました：“どうして悲しんでいるのか？”人たちは言いました：“アッラーのみ使いよ、彼がよく遊んでいた小鳥が死んでしまったのです。”すると預言者は彼を呼びました：“アブー・ウマイルよ、小鳥に何があったのかな？”」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が大人や年長者に対してどのように冗談を交わしていたかをアナス・ブン・マリーク(彼にアッラーのご満悦あれ)は伝えています：

「ザーヒル・ブン・ハラームという名前の荒れ地に居住していた男がいました。

彼は見た目のさえない装いをしていましたが預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼の事を敬愛していました。ある日、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼が品物売っているのを見かけた時に後ろから彼のことを抱きしめました。彼(ザーヒル)にはその相手が誰か分からずに言いました：“離してくれ、あなたは誰だ？”そして振り返り相手が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)であると気づくと彼は背中を真っすぐにして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の胸にしっかりと押しつけました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼に冗談を言いました：“人たちよ！誰かこの僕(ザーヒル)を買う者はいるか？”すると彼(ザーヒル)は言いました：“アッラーのみ使いよ！アッラーに誓って、私は売り物の価値がありません”すると彼(預言者)は言いました：“いや、アッラーから見ればあなたはとても価値のある人物です。”」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は寛容な性質と実直な振る舞いを兼ね備えたよき品性の持ち主でした。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は家族や教友たちとの間で冗談を交わすことはありましたが、大きく口を開けて笑うことはなく常に微笑まれていました。アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています：「アッラーのみ使いは微笑まれるのが常でしたので、その御方が大きく口を開けてお笑いになったのを見たことがありません。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は愉快によい仲間付き合いをされていましたが、アッラーの神聖さが冒瀆された時には顔色を変えて怒りを表されていました。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています：

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が旅からお帰りになりました。その時私は戸口をカーテンで覆っておりましたが、それには画が描かれておりました。アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はそれをご覧になると引き裂き、顔色を変えて言いました：

“アーイシャよ、審判の日アッラーの御許で最もひどい懲罰に遭うのは、アッラーの創造を模倣しようとする輩なのだ。”

これは画を家の中の壁に掛けること、また家の角や棚の上などに像を飾ることが禁じられていることを示しています。また慈悲の天使がその家に入ることを妨げることにもなるのです。(※画は人や動物など魂が宿るものを描くことを対象に禁じられています)

預言者(彼の上に平安がありますように)の睡眠

ウバイ(彼にアッラーのご満悦あれ)によればアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「ベッドに入る前には、腰まきのへりで、そのベッドを拭ってからアッラーの名を唱えなさい。なぜなら、ベッドの上になにが残されているか誰にもわからないからです。ベッドに横たわる時には、右側を下にし、次のように唱えなさい。

“アッラーよ、あなたを讃美します。主よ、あなたの恩寵によって、私はベッド上に横たわり、また、あなたによって、私はベッドから起き上がります。もしも、あなたが、私を死なしめる場合には、どうか許しをお与え下さい。もしまた、生かして下さる場合には、どうか、あなたが敬虔な人々をお守りするのと同じように、私をお守り下さい”

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は全ての信仰者に指導してくれました:

「ベッドに行く前に、礼拝の時と同じウドゥーを行ないなさい。それから、右側を下に横たわりなさい・・・」

アーイシャは言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は毎晩就寝する時には、両手を合わせてそこに唾を吐くようにして息を吹き込み、それからその中に向かって: 言え、「かれはアッラー、唯一なる御方であられる。」言え、「黎明の主にご加護を乞い願う。」言え、「ご加護を乞い願う、人間の主、」を唱え、それからその両手でもって頭と顔から始め、それから体の前部、と届く範囲の体の部分を撫でました。そしてそれを3回繰り返したものです。

アナス・ブン・マリーク(彼にアッラーのご満悦あれ)によれば、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は就寝する際に、こう言ったものでした:

「私たちに食べさせ、飲ませ、満足させ、住まいを与えられるアッラーに賞賛あれ。十分に満足することなく、保護され安らぐ場所もない者たちも山ほどいるというのに。」

アブー・カタダ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は旅行で夜に野営される時には右側を下に横たわり、夜が明ける少し前には腕を立て、頭を手のひらに乗せた状態でいました。

今日、私たちの多くが至高で偉大なるアッラーの恩恵に授かっている中で、使徒たちの長であり最後の預言者でありまた最良の人物である方の寝床について見てみましょう

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が身を横たえるベッドは、木の繊維が詰められたなめし革製のものでした。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の教友たちと共にウマル(彼にアッラーのご満悦あれ)が彼の家に入った時、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は起き上がり、ウマルは彼の体と敷物(粗末な)の間には何も無いことに気づきました。そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の体の脇には敷物の跡が残り、ウマルは泣きました。それを見て預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はウマルに言いました:「ウマルよ、どうして泣いているのか?」ウマルは言いました:「ローマ皇帝とカウサルは贅沢に生活し一方であなたは困窮した状態にあります。」預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:「ウマルよ、彼らは現世を得、私たちは来世を得ることに満足しないのですか?」私(ウマル)は言いました:「はい、その通りです」預言者は言いました:「これこそ真実なのである」

夜の礼拝

夜の暗闇がマディーナを覆っても、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の心は礼拝やアッラーへのズィクル(唱念)に輝いていました。そして彼は天と地の主に対して真夜中に礼拝を捧げ、すべての事象の鍵を御手にされる御方に祈願しました:

衣を頭から纏う者(ムハンマド)よ、

夜間に(礼拝に)立て、少時を除いて。

夜間の半分、またそれよりも少し縮めて(礼拝に)立て、

あるいは、それよりも少し多く礼拝に(立て)、そしてゆっくりと慎重な調子で、クルアーンを読め。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は夜の礼拝の際、両足を腫らしてしまうまで長く立ち続けました。人々が「アッラーのみ使いよ、アッラーは、あなたの以前の罪、今後の罪全てをお許しになったのではないですか?」と尋ねると、アッラーのみ使いは「私が、それを大変感謝しているしもべであることを示してはならないのですか」と言われました。

アル=アスワド・ブン・ヤズィードは言いました:

「私はアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)にアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の夜の礼拝について尋ねました。すると彼女は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は夜のはじめの時間帯に睡眠をとり、(それから夜明け前の時間帯に起き上ってウイトルの礼拝を捧げ)もし望まれた時には妻と性交されました。そしてアザーンを聞かれた時に(再び)起き上がり大浄の状態にある時には水で全身を浄め、それ以外の時にはウドゥーを行い礼拝に出られました。」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が夜の礼拝を長く捧げられていたことは驚嘆すべきことであり、私たちはそのことを良き模範のひとつとして捉えるべきです。

アブー・アブドゥラー・フゼイファ・ブン・アル=ヤマーン(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:

私は一夜、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と礼拝を行った。そのかたは初めに雌牛章(クルアーン第2章)を読まれた。私は、み使いは100節読まれた後に立礼されるのではないかと思っていた。しかしそのかたは(なおも読唱を)続けられた。そこで私は、み使いは一ラカートでその章の大半を読まれてしまうのであろう

と考えた。しかしそのかたはなおも続けられた。私は、み使いはこの章を完結した後立礼されるのであろうと思った。それからみ使いはイムラーン家章(クルアーン第3章)に入られてそれを読唱し終えられ、更に婦人章(クルアーン第4章)に入られて、それをゆっくりと読まれた。そしてそのかたはアッラーを讃美することに言及している節にかかりますと「アッラーに称讃あれ」と讃美されました。み使いは(主への)祈願の節にさしかかりますと祈願されました。また(主に)救いを求める節にさしかかりますと、救いを求められた後立礼され、そして「偉大なるアッラーに称えあれ」と言われました。み使いの立礼の時間はそのかたが立っていたのと同じくらい継続しました。そしてみ使いは(また直立の姿勢に戻られて)「アッラーが彼を称えた者の言葉を聞こし召されますように」と言われた。それからそのかたは、そのかたが立礼されていたのと同じくらい長い間立っておられてから跪拝に移られました。そして「至高のわが主に称えあれ」と言われました。み使いの跪拝の時間はそのかたが立っていたそれに近いものでした。

ファジュルの後

夜の静けさが終わり明け始めると、マスジドではファジュル(早朝の)礼拝が集団で行われました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はファジュルの礼拝後には日の出までの間、座ったままの状態であッラーへのズィクル(唱念)を行っていました。それから2ラカートの礼拝をされました。

ジャービル・ブン・サムラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は日の出前の礼拝を行った後、太陽が十分高く昇るまでそのままそこに正座していた。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は、このスナは偉大な報奨をもたらすものであるとして人々に奨励しました。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「ある者がファジュル(早朝の)礼拝を集団で行い、それから日の出までの間、座ったままの状態であッラーへのズィクル(唱念)を行い、そして2ラカートの礼拝を行った場合、彼にはハッジ(巡礼)とウムラ(小巡礼)と同じような報奨が与えられる。」

ドゥハーのサラ

午前の太陽が激しく照り付け、熱風で顔が日焼けするドゥハーの時間帯に、人々は彼らの仕事に従事し用事を済ませていました。

しかしながら、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は来訪者との面会や教友たちへの指導、家族の世話などその重い責務が多くあったにもかかわらず、至高で偉大なるアッラーへのイバーダを行っていました。

ムアーザはアイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)に尋ねました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はドゥハー(午前の礼拝)をされておりましたか？」彼女(アイシャ)は答えました:「はい、彼は四ラカートされていました。でも、み使いが好んだ時はもっと多くされていました。」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は次のことを勧められました。アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

私の親友であるアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私に三つの事を行うよう勧められた。(それは)毎月三日間の断食、午前中に二ラカートの礼拝の挙行、夜、寝る前にウイトルの礼拝の励行である。

自宅での任意のサラについて

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家は信仰心で溢れ、イバーダとズィクル(唱念)で満たされていました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちの家もそのようであるようにと勧められました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「あなた方の家で礼拝を挙行しなさい。そして、そこを墓場のようにしてはなりません」

イブン・アル＝カイムは言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はスナナの礼拝と(特別な事情による)任意の礼拝の多くを家の中で行っていました。例えば、マグリブのスナナの礼拝についてはマスジドの中で行ったというハディースは伝えられていません。

自宅での任意のサラとその諸利益:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のスナナに従い、

女性や子供たちにサラの仕方を指導し、

シャイターン(悪魔)をズィクルやクルアーンの朗誦によって家から追い出します。また真摯にドゥアーを捧げ、リヤー(人から見られることを意識すること)からも遠ざけてくれるのです。

預言者(彼の上に平安がありますように)の涙

多くの男女は涙を流しますが彼らは如何に、また誰の為に涙を流すのでしょうか?

私たちの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼が望めばこの全世界も手にすることが出来、また天国での最高位の住まいも約束されていましたが涙を流していました。

事実、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は泣いていましたが、しかしながら彼は一人の崇拜者として泣いていたのです。

彼は礼拝において彼の主に話しかける時やクルアーンを聞く際、彼の優しい心と誠実さ、また荘厳で偉大なるアッラーに対する認識やかれの崇高さに対する畏敬の念によって涙を流したのです。

ムタリフ(イブン・アブドラー・ブン・アッシーール)は彼の父親の言葉として伝えています:

私が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を訪れた時、彼は礼拝の最中であり、彼の胸はまるで鍋が沸騰したかのようにむせび泣いていました。

アブドラー・ブン・マスウード(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私にクルアーンの読誦をお求めになった。私は「アッラーのみ使いよ、それはあなたに啓示されたものですが、(どうして)私があなたにお読みするのでしょうか」と言った。み使いは「私は私以外の誰かからそれを聞きたいのだ」と言われた。そこで私は「婦人章」を「われが、それぞれのウンマから一人の証人を連れてくる時、またあなた(ムハンマド)を、彼等の悪に対する証人とする時は、どんな(有様)であろうか」(クルアーン第4章41節)まで読誦した。するとその時、私はみ使いが涙を流されているのを見た。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の頭部にある白髪と、顎鬚にあるおよそ18本の白髪について注意深く見て下さい。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の口から語られ、それらの毛が白く変化した理由について耳を傾けるとあなたの心は恐れを覚えるはずです:

「アブー・バクル(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーのみ使いよ、(あなたの髪の毛が)白髪になりました。」預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「フード章、出来事章、送られるもの章、消息章、包み隠す章が私の髪を(恐ろしさのあまり)白くしたのです」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の慎み深さ

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々の中で最善であり完全な品行の持ち主でした。アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の人格はクルアーンそのものでした。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

私は人々に対する慈悲として使われたのである

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の慎み深さの表れとして彼は称賛されること、過度に賛辞されることを好みませんでした。

ウマル・ブン・アル=ハッターブ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

“キリスト教徒がマルヤムの子(イーサーのこと)の讚美において度を越したように、私のことを度を越して称えてはならない。私はかれ(アッラー)のしもべの1人に過ぎないのだ。それゆえ(私のことを)こう言うがよい:アッラーのしもべ、アッラーの使徒、と。”

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある人々が言いました:

“アッラーのみ使いよ、あなたは私たちの中で最良の御方であり、私たちの中で最良の方の息子であられます。また、あなたは私たちの長であり、私たちの長の息子であられます。”それを聞いて預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼らに言われました:

“人々よ、あなた方が普段、私を呼び掛ける呼び方で私の事を呼びなさい。そしてシャイターン(悪魔)の誘惑に従ってはなりません。私はムハンマド、アッラーの僕であり、かれの使徒である。私は至高で偉大なるアッラーが私に授けてくださった以上にあなた方が私の地位を高めることを好まない。”

ある人々は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)を過度に称賛して、彼が幽限界の出来事に精通していたり、利害を自由にできる力を持っていたり、また必要な事柄を自分自身で満たすことができ、そして病気を治癒することもできると信じています。

しかしながら、至高で偉大なるアッラーはそれらの主張を全否定し、クルアーンの中では次のように述べられています:

言ってやるがいい。「わたしはアッラーが御好みにならない限り、自分自身のための利害すら自由に出来ない。わたしがもし幽玄界を知っているならば、わたしは善いことを増し、また災厄に会わなかったであろう。

これは預言者であり、アッラーのみ使いであり天と地の間における最良の人物である彼は常に謙虚な姿勢で彼の主に立ち返っていました。彼は尊大な態度を嫌い、謙虚な人々の先導者であり、また主に対して自らを低くして示す指導者だったのです。

アナス・ブン・マールク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

教友たちは、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)以上に他の人物を愛することはありませんでした。しかしながら、彼らは預言者が来るのを見た時、彼の為に立ち上がることはしませんでした。それは彼がその行為を嫌うと知っていたからです。

また他の場面においても預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の驚くべき謙虚な姿勢とすばらしい品格を垣間見ることができます。その中にはたとえ責務に多忙極まりない中にあっても貧しい女性の為に時間を費やしたりしていたのです。

アナス・ブン・マールク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

『一人の女性が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとに来て言いました:「個人的に話したいことがあります」すると預言者は言いました:「マディーナのどの通りでも選んで座りなさい。私がそこに赴いて話を聞きましよう」と。』

善行を成して、称賛を受ける魂は

高慢さや尊大さへと持ち上げる

もし預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のミスク(ジャコウの香り)(※ここでは被造物に対するよき振る舞いや性質のたとえ)が被造物に広く行き渡ればその高ぶる気持ちは消え去るだろう

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の良き香りを受け、現れているもの隠れているもの全ての被造物が良き香りを放つかのように

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は謙虚な人々の先導者であり指導者でありました。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)によれば預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:「もし(羊の)腕か、あるいは足(の部分のみの質素な食事)に招待されたとしても、私は応じよう。またもし(羊の)腕か、あるいは足(の部分のみ)を贈られたとしても、私はそれを快く受け入れたであろう。」

またどの時代においても高慢な人々にとって、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のハディースは彼らが横柄に振る舞うこと、傲慢になることを抑制し禁じます。

アブドッラー・ブン・マスウード(彼にアッラーのご満悦あれ)は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がこう言ったと伝えています:

心の中に一微塵の重さでも高慢さをもつ者は、天国に入ることはないだろう

高慢さは、それが例え一微塵の重さであったとしても地獄へと導きます(アッラーにこの事からの加護を求めます)。

また高慢な者に対する至高なるアッラーからの懲罰について熟慮すべきです。傲慢に歩く者に対して如何に至高で偉大なるアッラーが激怒され彼等の上に怒りと厳しい懲罰を下されるのかを。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)によれば、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

“ある男が2枚組みの衣をまとい、長髪を肩になびかせつつ自惚れながら歩いていると、アッラーが大地の中に彼を飲み込ませた。そして彼は審判の日が来るまで、そこでもがき転がり続けるのだ。”

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の給仕

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は貧しく弱い立場にある給仕に対して仕事内容やその立場に関係なく、信仰深さや敬虔さに基づいて彼等を適切な境遇に置かれました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は給仕と雇用労働者について言われました:

彼ら奴隷達はアッラーがあなた方の手元に置いたあなた方の兄弟なのだよ。故にあなた方の食べるものを彼らに食べさせ、あなた方の着るものを彼らに着せてやりなさい。そして彼等の能力以上のことをさせてはなりません。もしそうなったときには彼らに手を貸してやりなさい。

ここで(預言者の)給仕が彼の主人(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について語っている驚くべき内容を聞いてみて下さい。彼に対しての傑出した証言であり、大いなる称賛でもあります。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の給仕以上に主人のことを称賛している給仕はいません。

アナス・ブン・マールク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

私はアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に10年間仕えました。アッラーに誓って彼は私に一度でも“チェ”などと不快な言葉を決して言わなかった。また彼はことにあたって私に「なぜこのようなことをしたのか?」とか「なぜこのようにしなかったのか?」などと言ったことはなかった。

数日、数カ月ではない10年という長い生活の中で、喜びや嘆き、悲しみ、怒りや変動、災難、貧困、豊かな時期があったにもかかわらず、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼を叱りつけたり、命令したりすることはありませんでした。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はむしろ逆に彼に報いそして喜ばせ、彼と彼の家族に必要なものを満たして、彼らの為に祈願したのです。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私の母は言いました:“アッラーのみ使いよ、あなたの給仕の為にアッラーに祈願してください” 預言者は言いました:“アッラーよ、彼の財産と子孫を増やしてください。そしてあなたが彼に与えられたものに祝福をお与えください”」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は勇敢であり力強くありましたが、決して正当な理由なしには他者を叱責したり、殴ったりはしませんでした。また預言者は彼のもとにある妻や給仕など弱者に対して厳しく接することもありませんでした。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は決して自らの手で誰れも殴ったことはなかった。女性も召し使いも殴ったことはなかった。ただ彼はアッラーの道のために戦っていた。

信徒たちの母(彼女にアッラーのご満悦あれ)も繰り返し彼のよき品格、そして彼が人類の中で最良の方であると証言しています。また預言者のよき品行と素晴らしい交際はムスリムでないクライシュ族の人々の間にあっても、同じ内容として証言されているのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が自ら被害を被ることで復讐したのを見たことはなかった。しかし至高なるアッラーが禁じたことで何かが犯されたならば彼は最もそれに対して怒りを露にされる方でした。そしてアッラーの使徒は一方が他方より容易である二者択一を迫られたときには、それが罪なものでなければ容易な方を選択しました。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は親切に振る舞い、忍耐する姿勢へと人々に呼びかけました。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「アッラーは寛大であり、全ての事柄において親切にすることを好まれる。」

贈り物と客人

人間は生活する上で感情的な結び付きを必要とするものであり、また人の心理状態は常に社会や家族、家庭の中にその必要性を求めています。そして互いの心をつなぎ付け、悪い感情を取り除く方法の一つに贈り物があるのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はよく贈り物を受け取り、そして(それに対しての)御返しをしていました。」

この贈り物の交換と相手に感謝する気持ちは寛大さと心の清浄をもたらします。

寛大さは預言者たちと使徒たちに備わる特質の一つであり、私たちの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこの点において最も卓越した御方でした。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「誰でもアッラーと審判の日を信ずる者は、客人を寛大にもてなし一昼夜、よき食事を与えなさい。また三日間、客人としてもてなさない。それ以後の善行はサダカとなります。客人にとって家主を困らせるまで彼の元に長く滞在することは合法ではありません。」

アッラーに誓って、全世界において預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)以上に素晴らしい品格と立派な性質を備えた者はいません。

敬愛する読者の皆さんには、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の最も卓越した振る舞い方を見て頂きたいと思えます。

サハル・ブン・サアド(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

一人の女性がアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとに服の布地を持って来ました。そして彼女は言いました:

「あなたが着れるように私の手で織りました。」すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はその時丁度それを必要としていたのでその服を受け取りました。それから預言者は私たちのもとに出てきてそれを腰巻として身に付けました。すると一人の男が言いました:「何と素晴らしい服でしょう・・・私にそれを着させてください」すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は肯定的な返事をし、内側に入ってそれを折りたたみ、彼に送りました。すると人々はその男を咎めて言いました:「あなたはそう言うべきではなかった。預言者はそれを必要としていたし、彼が誰の要求も撥ね付けたりしないことをあなたは知っていただろう。」するとその男は言いました:「アッラーに誓って、私はそれを着るために預言者に求めたものではありません。死んだ時に私を覆うものとして求めたのです」サハルは言いました:「後に彼が亡くなった時、それは彼を覆うために使われました。」

至高で偉大なるアッラーが選ばれ、特別に生まれ、模範とされた方の品格が優れていることに不思議はありません。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は慈善と寛大さにおける最も素晴らしい模範でした。

ハキーム・ブン・ヒザーム(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に無心をした。するとその御方は私に下さった。また私とその御方に求めると下さった。そしてまた私が求めるとまた下さった。そして(預言者)は言われました:

「ハキームよ!この財貨は緑あざやかで甘いものだ。善良な心でこれを受け取った者はそれで祝福される。だがそれを強欲さで受取った者はそれによって祝福されはしない。彼はいくら食べても満足しない者と同様である。上の手(施しの手)は下の手(物乞いの手)より良いのだ」

詩人は言いました:

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は宗教の完成を最も高い目的として掲げました

彼の志は他の創造物の誰よりも高いものでした

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はよき品性と振る舞いで人々に光をもたらします

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)一人の善事への取り組みはすべてのジンと人間に匹敵するほどでした

私は他に類の無い人物を見つけました

完璧な人物が全ての人類の中で一人だけ存在しました。それが預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)なのです。

ジャービル(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

ジャービル(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:「預言者は、何かを請われてそれを断ることはありませんでした。」

他に真似することのできない寛大な振る舞いに加えて預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々とよき交際をし、心から彼等のことを愛されていました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はいつも同席する人々すべてに微笑みかけられたので、人たちは自分が教友たちの中で最も寵愛されているのではないかと思われるほどでした。

ジャリール・ブン・アブドラー(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私が彼の家に入ることを拒絶したことはなく、イスラームを受け入れて以来私に微笑みかけてくれないことはありませんでした。」

同様の証言は他の人物からも伝えられており、私たちはそこから十分な教訓を得ることができます。

アブドラー・ブン・アル＝ハーリス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)よりも微笑む人物を見たことはありません。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)自身の言葉にみられるようにそれは不思議な事ではありません:

「あなたが兄弟に微笑むことは施しである。」

一方、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の給仕であったアナス(彼にアッラーのご満悦あれ)はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の個人や人々の集団の中には見られない卓越した特質について言及しています:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は最も親切な御方でした。もし誰かが預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に尋ねた時には、それを注意深く聞き質問者がはじめに立ち去るまでその場を離れませんでした。また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が握手をする際には同時に手を取り、相手が手を離すまで自ら手を引くことはありませんでした。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は寛大にそして親切に客人をもてなしました。そしてウンマに対しては慈悲深くありました。また彼は悪事を禁じ許容することはありませんでした。

イブン・アッバース(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はある男がつけていた金の指輪を御覧になった。その御方はそれを抜き取られて投げ捨てられた。そして「あなた方の中で地獄の熾火の中に入りたい者は、それを指にはめるがよい」と申された。

子供たちに対する慈悲

無情な人々は慈悲を知らず哀れむことも彼らの心にはありません。それはまるで硬い石のようであり人に与え受け取る際にも、人々に厳しく振る舞い人間の感覚や感情における愛情が彼らには無いのです。一方で至高で偉大なるアッラーが柔和な心を授け愛情を注いだ人物は理想的な愛情の持ち主であり、慈悲に包まれ哀れみ深くあります。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は息子のイブラーヒームを抱きかかえて接吻し、匂いを嗅いでいました。」

またこの慈悲は、彼の親戚に対して限ったことではなく一般のムスリムの子供たちにも示されました。

ジャーファルの妻であるアスマーウ・ビント・ウマイス(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が私のもとに来てジャーファルの子供たちを呼び、そして彼らの匂いを嗅いで涙を流しているのを見ました。私は言いました:“アッラーのみ使いよ、ジャーファルについて何か知らせを受け取ったのですか?” 彼は言いました:“そうです、ジャーファルは今日亡くなりました。”私たちは泣き始め、彼は立ち去りました。そして言いました:“ジャーファルの家族の為に料理を作りなさい。彼らは(悲嘆の為に)忙しいがゆえに。”」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の目には涙が溢れていました。サアド・ブン・ウバーダ(彼にアッラーのご満悦あれ)は彼に尋ねました:「アッラーのみ使いよ、どうしたのですか?」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「これはアッラーがその下僕の心につくられた哀れみなのだ。アッラーは哀みの情をもつ下僕達を哀れみ給う」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は息子のイブラーヒームを亡くされたときに涙を流されました。アブドゥル＝ラフマーン・ブン・アウフ(彼にアッラーのご満悦あれ)は彼に言いました:

「アッラーのみ使いよ、あなたも泣かれるのですか?」預言者は言いました:「イブン・アウフよ、これは慈悲なのだ」それから彼は再び涙を流しそして言いました:「目からは涙が零れ、心は悲しみにあってもアッラーが喜ばれないことを私たちは口にはしない。イブラーヒームよ、あなたと離れることが悲しいのです。」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の品格は見習うべき、そして追従すべき偉大なものです。特に私たちの時代は、子供たちに対する愛情と彼らに対する適切な思いやりが欠落しています。彼らは将来、親となりウンマを守護し人たちとの関わり合いが待ち受けています。私たちの無知や傲慢さ、愚かさ、見識の無さは子供や若者たちと共に心に鍵をかけて閉じてしまうのです。

しかしながら、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の行動と言葉は心の鍵を開いてくれます。それは子供たちに対する愛情や正しい評価を得ることが出来るようになります。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は若者たちの地位を高められました。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は子供達の側を通りかかるとその子供達に挨拶をされた。そして次のように言った:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は以前そのようにされていた。」

子供は騒々しく絶えず動き回り、彼らに疲れを覚えることもあります。しかしながら、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼らに怒ることもなく、叱ることも咎めたりすることもありませんでした。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼らに親切で自制し穏やかさを保っていました。

アイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「人々はドゥアー(祈願)をしてもらう為に自分達の子供を預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとに連れてきました。ある日、赤ん坊の一人が彼の服に放尿しました。すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は水を持ってくるように頼み、その部分に水をかけましたが(完全に)服を洗ったりはしませんでした。」

親愛なる読者の皆さん、子供たちが預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家の中で(預言者と)遊んだり、冗談を言ったりして、あなたが子供たちの笑い声や美しい言葉を聞いたりすることを想像できますか？ 実際、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこれらすべての事を行っていたのです。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はハサン・ブン・アリーに彼の舌を突き出して見せました。すると子供は彼の赤い舌をみて笑いました。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福はウンム・サラマの娘のザイナブとよく遊びました。彼は何度も繰り返して「ザイナブ、ザイナブ」と言いました。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の慈悲は偉大なイバーダ(崇拝行為)の中にあっても、幼児にまで及んでいました。

アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼の娘のザイナブの娘でありアブー・アル＝アース・ブン・アッ＝ラビーウの娘でもある孫娘のウマーマを抱きながら礼拝しました。直立礼の時は彼女を片手で抱きかかえ平伏する時には彼女を下に置きました。

またマフムード・ブン・アッ＝ラビーウ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私は5歳のときに預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がバケツから水をすくい口に含んで私の顔に掛けて遊んだことを覚えています。そのバケツは私の家にある井戸から水を汲むためのものでした。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は年長の者にも年少の者にも教えていました。イブン・アッバース(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある日、私は預言者(彼にアッラーからの平安と祝福あれ)の後ろにいました。彼は私にこう言いました:

「若者よ、あなたにいくつかの教訓を教えてあげよう。いつもアッラーを心に留めておきなさい。そうすればアッラーはお前をお護り下さる。アッラーを心に留めておけば、あなたはアッラーを眼の前に見ることができる。願いごとがあればアッラーにお願いし、頼みごとがあればアッラーに助けを求めなさい。」

これは預言者の人生と彼の高潔な性質にみる旅です。それは私達の心を活気づけまたそれに倣うことによって、この人生での歩み方について私達を導いてくれるものです。

私達の家の中は父親の愛情と母親の思いやりを切望する子供たちと幼児たちとで活気づいています。幸せは子供たちの心を覆い、そのため子供たちは感情面と道徳面において調和の取れた状態で成長します。そして至高で偉大なアッラーの導きがあれば、両親が良く育んだ人物はウンマを率いる能力を授かるのです。

寛容と優しさと忍耐

力による暴力や権力の搾取は、暴君や不正行為をする者たちの属性です。預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は公正な判断の基礎を築き上げ、また全ての人々に対する権利を取り戻しました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は至高で偉大なアッラーが、不朽に善事を求める者に対して定められた命令と禁止事項を用いて人々を統制しました。その為、私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家において不正や暴力、侵害や略奪などを恐れることはありませんでした。

アイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はアッラーの道における戦時以外には女性や給仕など、誰にも彼の手で殴ったことはありませんでした。また人が彼に悪事を行っても自分の為に復讐することはなく、至高なるアッラーの定めを冒瀆した者に対してのみ(至高なるアッラーの為に)復讐しました。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と一緒に歩いていた。その御方は厚い縁のついたナジュラン製の外衣を召しておられた。その外衣をベドウィンの男が近づき強く引いた。私が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の首を見ると外衣の厚い縁で跡が出来ていた。その男は『ムハンマドよ、あんたの所にあるアッラーの富を私にも分けるよう命じてくれ』と言った。アッラーのみ使いは彼の方を向かれ、お笑いになって彼に与えるようお命じになった。」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がフナインの戦いから戻って来た時に、何人かのベドウィンたちが預言者に追従して頼みました。預言者はラクダの上に乗っていましたが、彼等に棘のある樹の方向に追いやられ彼(預言者)のマントがその間に巻き込まれました。その為、マントを脱いで言いました:

「私のマントを寄こしなさい。あなたたちは私が分配しないと思って恐れているのですか？そして預言者は言いました：“アッラーに誓って、もし私がここにある樹々のように沢山のラクダを所有していたならば、それらをあなたたちに分配するでしょう。そしてあなたたちは私が吝嗇でも臆病でも嘘つきでもないことが分かるはずです。”」

教育とよき指導には欠かせない最も優れた性質の一つに、全ての事柄に対する親切な振る舞いがあります。それは善事に繋がる益をもたらし、危害を軽減させます。

預言者の教友たち(彼らにアッラーのご満悦あれ)は熱心に従っていた為、彼等が誰かの間違いを見つけた時には、急いで相手にその行為を禁じました。彼等の行為は正しいものです。しかしながら、寛大で優しい預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼等が注意するのを禁じました。それは知らずに禁じた行為がより大きな危害を及ぼすかもしれないからです。その為、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はその状況の中で、より好ましい振る舞いをされました。

アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：

一人のベドウィンの者がモスク(礼拝所)の中で放尿しました。すると何人かの教友たちが急いで立ち上がり彼を打ちのめそうとしました。すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました：

「彼を放っておけ。そして小便(で汚れた場所)にバケツ 1 杯分の水をかけるのだ。あなた方は物事を簡易にするように遣わされたのであり、困難にするために遣わされたわけではないのだから。」

ダアワー(布教活動)に於ける預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の忍耐は、彼の教えに従い、そして自分の為に復讐するのではないという動機を私たちに与えてくれます。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に尋ねました：

「ウフドの戦いよりも困難な状況に直面したことはありますか？」すると預言者は言いました：

“私はあなたの民(クライシュ族)より(過酷な迫害を)被った。そしてその中でも最も過酷なものがアカバの日のそれだった。私はイブン・アブド・ヤーリール・ブン・アブド・クラールにイスラームを提示したが、彼は私の望みに応じなかった。それで私は落胆して去り、カルン・アッ=サアリーブに到着するまで放心状態にあった。そしてそこで顔を上げた時、私は雲の陰に覆われていた。見れば、その雲の中にはジブリール(ガブリエル)がいた。(ジブリールは私を呼んで)言った：「偉大かつ荘厳なるアッラーはあなたの民の言葉と、あなたに対する彼らの返答をお聞きになられた。それでかれはあなたが(今)彼らに対して望むことを命じさせるべく、山の天使をあなたに遣わされたのだ。」すると山の天使は私を呼び、私に挨拶すると、こう言った：「ムハンマドよ。アッラーはあなたに対するあなたの民の言葉をお聞きになられた。そして私が山の天使である。あなたの主は、あなたのために私を遣わされたのだ。一体あなたは私に何を望みますか？お望みなら アル=アブシャバーンをもって、彼らを一潰しにしてやるぞ。」それで私は言った：

それで、預言者(彼の上に平安がありますように)は言った：

「いや。私はアッラーが彼らの子孫の中から、かれのみを崇拜して何ものをもかれに並べることのない者たちが生まれ出ることを望むのだ。」」

今日あるムスリムの人たちは、ダアワー(布教活動)を急ぎ立て、早急に結果を求めたりします。また個人の願望の為に復讐が執り行われ、ダアワーに於ける真摯な姿勢は損なわれているのです。

幾つかのダアワー(布教活動)では、この振る舞いが彼等の間で普及した為に成功することはありませんでした。忍耐と寛大さはどこに行ったのでしょうか？

長い年月の後、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が望まれたことが実現しました。それは許容と忍耐、そして長い努力の末のことです。

誰も預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)以上に優れた高貴な人物は存在しません。

地位があり名の知れた全ての人々でさえ預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の存在と比べることはできないのです。

高貴な存在であるサハーバ達も預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の前では彼(預言者)に並ぶことのできない存在です。

またマッカやターイフの族長は名誉があり高い地位の者たちでしたが、やはり預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の前では彼(預言者)と並ぶことができないのです。

イブン・マスウード(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました：

私はまるでアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が預言者(彼らの上にアッラーからの祝福と平安あれ)たちの中からある預言者について話しているのを見ているようです。その預言者の民の者は彼を苦しめ預言者は血を流しました。そして預言者は顔の血を拭いそれから言いました：

“アッラーよ、私の民をお赦し下さい。彼らは知らないのです。”」

ある日、ユダヤ人のザイド・ブン・サアナは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が教友たち(彼等にアッラーのご満悦あれ)と葬儀を執り行っている最中に負債の不平を言う為に彼のもとへと来ました。そして預言者の服を掴み、怒った顔と不快な言葉で預言者に言いました：「ムハンマドよ！俺の負債を払いたくないのか？」

するとウマル(彼にアッラーのご満悦あれ)はザイドを見て怒り、そして言いました：「アッラーの敵め、私が聞き、見たことをお前はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)にしたのか？アッラーに誓って、アッラーは彼に真実を携えて遣わされた。もし私が彼の叱責を恐れなければ、私の剣でお前の頭を切り落としてやる」

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はとても落ち着いてウマルを見つめ、そして言いました：

「ウマルよ、私と彼はこれよりも困窮した状態にあったのだ。そなたは私がよい振る舞いで持って彼の負債を返済するよう、また彼がよい振る舞いで持って彼の権利を主張できるようにしなさい。ウマルよ、彼を連れて行き彼の権利として当然払われるべき取り分を彼に与えなさい。またさらに20サーア分のナツメヤシを彼に与えるのです。」
ユダヤ人のザイドはウマル(彼にアッラーのご満悦あれ)から20サーア分のナツメヤシを余分に与えられたことに対して言いました:「ウマルよ、これは何を意味するのか?」

ウマルは言いました:

そなたの憎しみの見返りに、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が私に対して、そなたに余分に与えるよう命じたものである。

ザイドは言いました:「ウマルよ、私の事を知っているか?」

ウマルは言いました:「いや、知らない。お前は誰だ?」

彼は言いました:「ザイド・ブン・サアナ」

ウマルは尋ねました:「ラビ(ユダヤ教の指導者)か?」

彼は答えました:「ラビ(ユダヤ教の指導者)である」

ウマルは言いました:「それならば、どうしてアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)にあのような事をして、またあのような事を言ったのか?」

ザイドは言いました:

「ウマルよ、私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の顔の中に二つの事を除いた全ての預言者性を確認することが出来た。その二つは目では見ることでできないものである。第一に、預言者の忍耐が怒りに優るものか。そして第二に愚かな振る舞いに対して、より寛大であるかである。今、私はこれら二つの事を試みて確認することが出来た。それ故にウマルよ、あなたを私の証人としてアッラーが私の主であり、イスラームが私の宗教であり、ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が預言者であることを証言する。またあなたを証人として、私の所有する財産の半分をムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のウンマ(共同体)へのサダカ(施し)とする。」

するとウマル(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:「その中の幾分かにしなさい。彼等全てに影響を及ぼすことはできないから」

ザイドは言いました:「その中の幾分かを」

ザイドはアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のところにへと戻り、そして言いました:「私はアッラー以外に神は無いことを証言します。そして私はムハンマドがかれの僕であり使徒であることを証言します。」こうしてザイドは預言者を信じ、そして証言したのでした。

この出来事の結果とそこに至るまでの長い会話は、ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が私たちの模範であるという考え方の基礎を築き、人々に対する布教活動には優しさを伴った忍耐と辛抱強くあるようにと呼びかけます。またそれは人々が最善でもって行動した時に勇気づけるものであり、彼等の心に明るい希望を持たせるのです。

アイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「私はマディーナから預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)とウムラに行きました。そしてマッカに到着した時、私は言いました:

『私の父や母よりも大切な方であるアッラーのみ使い様、あなたが礼拝を短縮された時、私は完全な形で(短縮することなく)礼拝を行いました。またあなたが食事されたのに対して私は断食しました。』すると預言者は言いました:

『アイシャよ、立派である』そして私を非難することはありませんでした。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の食事

選ばれし者や権威ある人々の家庭では豪華な食事が並びますが、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の食事とは一体どのようなものだったのでしょうか?多くの国々とそこに住む人々を統制し食糧を運搬するラクダが預言者のもとへと数多く行き交い、同様に金銀が彼のもとへと流れる中で、果たして預言者は豊かに食事を摂り、王の立場として豪華にその生活を送ったのでしょうか?もしくはそれ以上に彼の生活は完璧で理想的なものだったのでしょうか?

驚かないで下さい。アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の食事は不十分で、とても簡素なものでした。アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は伝えています:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼のもとで客をもてなす時以外にパンと肉を昼食、そして夕食時に一緒に出すことはありませんでした。」

الصف:この意味は、食べ物が少ないときに多く食することを指します。

このハディースの中では、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は十分に食さなかったこと、もしくは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が客をもてなした時以外には満足に食事されたことは無いことが示されています。そして預言者が満足に食事したのは、客に対する歓待の意を表し、礼節を示す場合のみでした。

アイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ムハンマドの家族は、大麦作りのパンをアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が逝去するまで、二日つづけて十分に食べたことはなかった。」

また別の伝承にはこうあります:

「ムハンマドの家族はマディーナ移住後から彼の死まで、3晩連続でパンを満腹に食べたことはありませんでした。」
預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとには時々何も食べ物がありませんでした。その為、彼は空腹の状態で寝床につきました。

イブン・アッバース(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「彼(アッラーからの祝福と平安あれ)と彼の家族は夕食にありつけず、何夜も連続して空腹のまま夜を過ごしたものでした。そして彼らのパンといえば、大方は大麥のそれだったのです。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は物資の面で困難な状況下にあったという訳ではありません。むしろ彼のもとからは多くの財が流れ、またラクダは豊富な供給物資を彼のもとへと運んできました。しかしながら、至高で偉大なるアッラーはかれの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対して最も完全で正しい状況を選ばれたのです。

ウクバ・ブン・アル＝ハリス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある日、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちと共にアスルの礼拝を終えてから急いで家の中に入られ、そしてすぐに戻って来ました。その時、私もしくは誰かがそのことについて尋ねました。預言者は言いました:『私は家の中にサダカ(施し)の為の金を残したままでした。そのまま今晚、手元に置く事を好まなかったのでそれを分配したのです』」

驚くべきその寛大さは、このウンマ(共同体)の長である預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の特徴だったのです。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

ある男がアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に山あいを埋め尽くす沢山の羊の群れを求めた。そこで彼はその男にそれを与えた。さてその男は彼の部族のもとにやって来て次のように言った:

「人たちよ、イスラームに入りなさい。アッラーに誓って本当にムハンマドは貧困を恐れることのないほど沢山の物をくださるのだから。」

この真似することのできない寛大さと共に、このウンマ(共同体)の預言者である彼の境遇も示したいと思います。

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は逝去されるまでテーブルの上で食事をしたことはなく、また柔らかいパンを食べたこともありませんでした。」

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています。かつて預言者は彼女のもとに来て次のように言いました:

「あなたのもとに食事はありますか？」彼女(アーイシャ)は言いました:「いいえ、ありません」とすると彼(預言者)は言いました:「(それなら)私は断食します。」

また真正な伝承として預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と彼の家族は、一ヶ月間、二ヶ月間となつめやしの実と水だけで生活しました。

この僅かな食事と食糧の不足にもかかわらず、彼の高潔な品性とイスラームの性質はアッラーの恵みに対する感謝を示しました。また食事を準備した者に対しても同様に感謝の意を表し、たとえ彼が間違っただとしても、責め立てることなく彼の努力を評価したのです。

それ故、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は食べ物に対して不平を言ったり、料理する者に対して非難することはありませんでした。また食べられるものを拒否することはなく、無いものを求められたりすることはありませんでした。彼こそがウンマ(共同体)の預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)であり、胃袋を特定の食べ物で満たすことに関心を寄せることはなかったのです。

アブー・フライド(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は食べ物のことで苦情を言われることは全くなかった。その御方はお好みになれば食され、好まれなかったらそれを残された。

多くの飲食物を摂取されている敬愛なる読者の皆様に、シェイク・イブン・タイミーヤの簡潔な言葉を聞いて頂けたらと思います:

「食べ物と衣服に関して:最善の正しい手引きは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の振る舞いの中にあります。彼の作法として、彼が好む食べ物があった際にはそれらを食べて拒否することではなく、無いものを求められたりされることもありませんでした。パンと肉がある時にはそれらを食べ、果物とパンと肉がある時にはそれらを食べ、ナツメヤシ1つとパン1つがある時にはそれらを食べました。彼のもとに2種類の食べ物があった際に、“同時に2種類の食べ物を口にはしない”とは言いませんでした。また美味しく甘味な食べ物を避けたりすることはありませんでした。」

ハディースの中で、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

私は断食をしてはそれを解き、夜中礼拝に立てば寝るのです。そして女性と結婚もすれば肉も食します。誰でも私のスンナ(慣行)から離れる者は私たちウンマ(共同体)の間ではありません。

至高で偉大なるアッラーは、禁じられてはいないよきものを食べ、そしてアッラーに感謝するようにと命じられました。誰でもよき食べ物を禁じる者は法を侵害したことになり、また感謝しない者はアッラーに対する権利を疎かにしたことになります。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の手引きは最善で最も適度なものであり、次の2つにある方向性とは異なるものです:

人々が浪費して望むものを食べ、法で定められた義務を遵守しないこと。

またよい食べ物を禁じ、至高なるアッラーが法(シャリーア)では定められていない修道院(禁欲)生活を導入したりすることです。イスラームではアッラーによって修道院(禁欲)生活を送るようには命じられていません。

そして彼(彼にアッラーの慈悲がありますように)は言いました:

「全ての合法的なものは善きものであり、全ての善きものは合法的なものである。至高で偉大なるアッラーは私たちに善きものを合法とし、私たちにとって悪しきものを非合法とされた。それ故、よき食べ物には益する要素と甘美さが含まれている。アッラーは私たちを害する要素を含むもの全てを禁じられたのであり、私たちを益するもの全てを合法とされたのである。」

また彼(彼にアッラーの慈悲がありますように)は言いました:

「人々は食や衣服、また切望や満足度などに於いて、それぞれに異なる多様な状況下の中にある。また個人一人を取り巻く状況も異なる。しかしながら、その中で最も善い行いというものはアッラーに対して最も従順なものであり、また最も人を益する行いである。」

人の名誉を守ること

知識やズィクルの為の集まりは数ある集まりの中でも最善のものです。その集まりがもし人類の指導者によって執り行われ、彼が話し、教え、指導されたならばあなたは思うでしょうか?

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の集まりは清く、彼の内なる部分は間違いを犯した者を正し、無知な者に対しては教示し、不注意な者に対しては警告しました。そして彼の集まりの中では全ての善きこと以外の事は拒絶されたのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は注意深く話し手の言葉に耳を傾けましたが、陰口する者や悪評を言いつらす者、中傷する者を許しませんでした。彼は他人の名誉の為に言い返したのです。

イトバーン・ブン・マーリク(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの平安と祝福あれ)は礼拝のために立ち、礼拝を捧げ、そしてこう言いました:

『マーリク・ビン・ドフシュンはどこにいますか?』それに答えて彼らの中の一人がこう言いました。『あいつは偽信者だ、アッラーもその使徒も好きではないのだろう』すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は次のように言いました:『彼のことをそのようにいってはいけない。彼が『アッラー以外に神は無い』といったことをあなた達は見たであろう。こうして彼もまたアッラーのご尊顔を拝すること(つまりアッラーのお喜び)を願っていることになるのですから。アッラーはアッラー以外に神は無いと唱えてアッラーのお喜びを望む者には地獄の業火を禁じられたのだ。』また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は嘘の証言をする者と人の権利を侵害する者について警告されました。

アブー・バクル(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこう 3 回繰り返し言いました:“大罪の内でも最大のものを教えようか?”(人々は)言いました:“はい、アッラーの使徒よ。”(預言者は)言いました:“アッラーに対してシルクを犯すこと、そして親不孝だ。”そして(預言者は)座ると、寄りかかってこう言いました:“そして虚言(もその内の 1 つ)である。”(アブー・バクラは)言いました:“そして彼(預言者)は、私たちが“もう黙ってくれたらいいのに”と思うまで、それを繰り返し言い続けました。”

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼がとても愛された信仰者たちの母であるアーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)にでさえ、彼女の陰口に対して非難しその危険性について説明したのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に『サフィーヤはこれこれですが、あなたには十分です』と言いました」

何人かの伝承者は次のように言いました: その意味は彼女(サフィーヤ)の身長が低いということ。

すると預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:「あなたが放った一言をもし海の水に混ぜたならば、その為に海の水は変色するだろう」と。

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は自分の仲間たちの名誉を守った者に対して吉報を伝えました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「仲間に対する陰口から彼(仲間)の名誉を守った者は誰でも、アッラーが必ず地獄の業火から助けるであろう」

至高なるアッラーのズィクル(唱念)を頻繁に行うこと

このウンマ(共同体)第一の指導者である預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)にとって崇拜行為と同様に至高で偉大なるアッラーに対する心での結び付きはとても重要なことでした。彼は至高で偉大なるアッラーをに対して想念する事なく無駄に時間を費やすことはしませんでした。そしてかれを讃え、かれに感謝し、かれに罪の赦しを乞い、そしてかれに悔悟したのです。

全能なるアッラーが彼(預言者)の過去と将来の罪を赦されたにもかかわらず、それでも彼(預言者)は全能なるアッラーに感謝するしもべとして、感謝する預言者として常にアッラーを讃えました。預言者は彼の主に対する尊敬の念を示し、かれを讃え、かれにドウアー(祈願)し、かれに悔悟して帰りました。そして彼(預言者)は時間の価値を知り

それを最善のことに費やしました。アッラーに対する従順な行いと崇拜行為に役立てるように最大限の努力をしたのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「彼(アッラーからの祝福と平安あれ)はあらゆる状況において、至高なるアッラーを想念していました。」

イブン・アッバース(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「私たちはアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が一つの集まりの中で次の言葉を100回唱えるのを数えました:

「主よ、私をお赦し下さい。私の悔悟を受け入れて下さい。本当にあなたはよく悔悟を受け入れ、よくお赦し下さるお方。」

「アブー・フライラ(彼にアッラーのご満悦あれ)はこう言いました:

「私はアッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がこういうのを聞きました:

“アッラーにかけて。私は毎日70回以上アッラーに罪の赦しを乞い、かれに悔悟する。”」

イブン・ウマル(彼らにアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「私たちはアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が一つの集まりの中で次の言葉を100回唱えるのを数えました:

「主よ、私をお赦し下さい。私の悔悟を受け入れて下さい。本当にあなたはよく悔悟を受け入れ、よくお赦し下さるお方。」

また信仰者たちの母であるウンム・サラマ(彼女にアッラーのご満悦あれ)はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が頻りに次のドウアー(祈願)を彼女の家で唱えていたと話しました:

「心を変転されるお方よ、私の心をあなたの宗教の下に確立させて下さい。」

隣人

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の隣人であることは何と名誉な事でしょう。アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)から見て、隣人の存在は非常に重要な地位を占めていました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「もしかすると遺産相続までさせるのでは、と私が訝(いぶか)るほどに、ジブリール(ガブリエル)は私に隣人への善行を命じ続ける。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はアブー・ザッル(彼にアッラーのご満悦あれ)に次のように言いつけました:

「アブー・ザッルよ、あなたはスープを作る時には少し水を足しなさい。そしてあなたの隣人にそれを分けてやりなさい。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は隣人を害する者に対して警告されました:

「隣人を不当な行為でおびやかす者は、天国に入ることができない」

そして預言者(彼にアッラーからの平安と祝福あれ)は隣人に善くするよう次のように言いました:

「アッラーと審判の日を信ずる者は、隣人に親切にすべきです。」

良き交際

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「ある日、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)もとに何某についての情報もたらされた時、預言者は“何某はどうしてこれこれの事を言ったのか?”とは言いませんでした。その代わりに“ある人々はどうしてこのようであるのか?”と問われました。」

アナス・ブン・マリク(彼にアッラーのご満悦あれ)によると、ある人物がサフランの染色をしてアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のもとへ来ました。アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人物の顔に彼が好まない点を見つけたとしても、直接それに対して非難することは滅多にありませんでした。そしてその人物が立ち去ろうとした時に預言者は言いました:

“あなたはこの人物に顔の染料を落とすように言いなさい。”

イブン・マスウード(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

“あなたたちに地獄の火が触れることを禁じられ、もしくは地獄に入ることを禁じられた者について伝えませんでしたか? その人物とはその者の礼儀正しさと優しい性質の為に人々が近寄って来る者のことです。”

権利を(適切に)満たすこと

人間には沢山の権利が備わっています。アッラーに対する権利、家族に対する権利、また自身に対する権利があります。そしてそれとは別にしもべたちに対する権利があるのです。

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は時間をどのように管理し一日を有益に過ごしたのでしょうか?

アナス(彼にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「3人の男が預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のイバーダ(崇拜行為)について尋ねるために、預言者の家に来ました。そして彼(預言者)のイバーダについて質問し、その内容が伝えられると彼等自身のイバーダが

不十分なものであると思い、そして言いました：“私たちは預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と比べることが出来ようか。預言者は以前と以後の罪も赦されているというのに。”

そして彼等の中の一人が言いました：“私は残りの生涯、夜通し礼拝に立つことにする。”

そしてもう一人の男は言いました：“私は継続して一年間断食しよう。”

そして3人目は言いました：“私は女性から身を引き生涯結婚することはしない。”

するとアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼等のもとに来て言われました：

“あなた方がこれこれの事を言った者たちなのか？アッラーに誓って、私はあなた方の中で最もアッラーを畏れるものであり、また最もアッラーに従順な者である。しかしながら、私は断食をすればそれを解き、また礼拝に立てば就寝し、女性たちとも結婚をする。誰であれ私のスンナに従わない者は、私たちの仲間ではない。”

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の勇敢さと忍耐：

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はイスラームを援護するため、また至高で偉大なるアッラーの御名を高めるために勇敢に振る舞いました。そして彼(預言者)はアッラーから授けられた恩恵を適切に役立たせたのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は伝えています：

アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は決して自らの手で誰れも殴ったことはなかった。女性も召し使いも殴ったことはなかった。ただ彼はアッラーの道のために戦っていた。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の勇敢さ：預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこの教えを説くためにクライシュ族の不信者たちの前に一人で立ち向かいました。そしてアッラーが彼に勝利を与えるまで、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)はこの教えに堅固であり続けたのです。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は一人で立ち向かうことや人々が全て対峙してる状況などを口にしたりはせず、むしろ至高で偉大なるアッラーに依拠し、かれ(アッラー)だけを信頼して、公然とイスラームの教えへと呼びかけたのでした。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は人々の中でも、最も勇敢でありそして最も固い決心の持ち主でした。人々が後退しても彼は毅然と留まったのです。

以前、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がヒラーの洞窟で瞑想に耽っていた時には決して害されることなく、クライシュ族の人々が彼(預言者)に戦いを挑むことも、不信者たちが彼(預言者)に矢を向けることもありませんでした。しかしながら、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がタウヒードを宣言し、公然と唯一至高で偉大なるアッラーに捧げられる崇拝行為の義務について呼びかけると、様相は一変したのです。不信者たちは驚いて言いました：

かれは多くの神々を、一つの神にしてしまうのですか。

彼等は偶像を彼等と至高で偉大なるアッラーとの仲介として捉えます。至高なるアッラーは彼等について言及します：

「わたしたちがかれら(神々)に仕えるのは只わたしたちがアッラーの御側に近づくためである。」(という)。

確かに、彼等は至高で偉大なるアッラーの唯一性を認めているのです：

言ってやるがいい。「天地からあなたがたに扶養を与えるのは誰なのか。」言ってやるがいい。「アッラーであられる。要するにわたしたちか、またはあなたがたのどちらかが導きの上であり、どちらかが迷っている。」

ムスリムの皆さん、死者に願いを請い、彼等を仲介とし、そして彼等に誓い、また彼らを恐れ、彼等に報奨を望むなど、ムスリムの国々の中でもこのようにシルクが一般化し、また蔓延している状況を注意深く見て下さい。人々は至高で偉大なるアッラーとの繋がりや彼等のシルクによって断ち、また死者たちを永生であると捉えるのです。

凡そアッラーに何もかを配する者には、アッラーは樂園(に入ること)を禁じられ、かれの住まいは業火である。

続いて、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の家から北側に対峙する山に場所を移してみましよう：

それこそはウフド山です。そこでは偉大な戦いが繰り広げられ、その戦いの中では、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の勇敢さと堅固さ、そして戦いでの負傷に際しての忍耐を見ることが出来ます。そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の高貴な顔からは血が流れ、彼(預言者)の前歯は折れ、彼の頭部は裂け目ができるほどの負傷を負いました。

サハル・ブン・サアド(彼にアッラーのご満悦あれ)は、アッラーの使徒(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の負った傷について伝えています。彼は言いました：

「アッラーに誓って、私は誰がアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の負傷した部分を洗い、また誰がその部分に水を注いで治療したのかを知っています。

彼は言いました：“アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の娘ファーティマ(彼女にアッラーのご満悦あれ)が彼(預言者)の血を洗い流しました。そのときアリー・ブン・アビー・ターリブ(彼にアッラーのご満悦あれ)が盾に水を汲み上から水を流しました。ファーティマは水のために逆って出血がひどくなることに気付き敷物の切れ端を取りそれを灰になるまで燃し、その灰を傷口につけました。それで彼(預言者)の出血は止まりました。彼(預言者)の前歯は折られ、そして顔は傷つき、彼の兜は潰されました。”

アル＝アッバース・ブン・アブドゥル＝ムッタリブ(彼にアッラーのご満悦あれ)はフナインの戦いでの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について、次のように言いました：

「ムスリム達が背を向けて敗走した時、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は彼の雌ラバを不信者達の方へ向けて駆り立て始めました。私(アッバース)は彼(預言者)の雌ラバを速く進まないように抑えるためにその手綱を掴んでいました。そして彼(預言者)は次のように言いました:

「私は預言者である。決して嘘ではない。」

また勇敢な軍人であり、よく知られている戦役やイスラームの歴史に於ける数々の出来事に参加したアリー・ブン・アビー・ターリブ(彼にアッラーのご満悦あれ)はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)について言いました:

私たちが戦闘の時、両軍は激しく交戦し私たちはアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の盾となりました。誰一人として彼(預言者)よりも敵軍に近い者はいませんでした。

またアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がダアワー(イスラームの布教)の際に受けた危害に対する忍耐は優れた例であり、また善き模範でした。それは至高で偉大なるアッラーがイスラームの基盤を定着させ、アラビア半島、シャーム地方、アム川北岸の地域等、あらゆる都市や遊牧地にイスラームが拡大するまで続いたのです。

「預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「私はアッラーにおいて、誰も出遭ったことのないような恐怖を被った。そしてアッラーにおいて、誰も受けたことのないような被害を被った。またビラールの脇に抱えられるほど少量のものを除いては、私と彼に生物が食するに値するような食べ物のない30昼夜に襲われたりもした。」

至高なるアッラーが預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に財産や戦利品を授けたにもかかわらず、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は1ディーナールも、また1ディルハムも遺しませんでした。その代わりに預言者の遺産であるこの知識を遺しました。この遺産は誰であれ、それを望む者が受け取れるのです。

アーイシャ(彼女にアッラーのご満悦あれ)は言いました:

「アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は1ディーナールも、また1ディルハムも、また一頭の羊も、また一頭のラクダも残すことなく、また遺言もしませんでした。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の祈願

ドゥアー(祈願)は偉大なイバーダ(崇拜行為)であり、至高で偉大なるアッラー以外に向けられることは許されません。

ドゥアーは人間がアッラーに対してその必要性を示し人間の力が足りないことを表明するものでもあります。またそれは人間が至高なるアッラーの僕であり、自身の謙遜を示す印でもあります。ドゥアーの中には至高で偉大なるアッラーに対する称賛の意味が含まれており、またアッラーに対する慈悲と寛容さの属性も加えられます。

それ故、アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「ドゥアー(祈願)はイバーダである。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は以前、頻繁にドゥアーをされ嘆願していました。またその際には、至高で偉大なるアッラーに対する彼の必要性を示し簡潔な言葉でドゥアーされることを好まれました。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は次のようなドゥアーをされていました:

「アッラーよ、私の諸事の守護であるところの、私の宗教を正して下さい。そして私の暮らしがそこにあるところの、私の現世を正して下さい。そして私の還り所がそこにあるところの、私の来世を正して下さい。そして私にとって生をあらゆる善において豊かなものとし、私にとって死をあらゆる悪から安らかなものとして下さい。」

また預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のドゥアーの中には次のものもあります:

「アッラーよ、不可視なる世界と可視なる世界を知るお方よ、天地の創造主よ、万物の主・支配者よ、私はあなた以外に真に崇拜すべきものはないことを証言します。そして自分自身の悪、シャイターンとシルク の悪から、あなたにご加護を求めます。そして自分自身を害すること、或いは誰か他のムスリムを害することからの庇護をあなたに求めます。」

また他には次のような預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のドゥアーもあります:

「アッラーよ、私をハラームのものではなくあなたのハラールのもので充分として下さい。そしてあなたの恩恵によって、私をあなただけで足る者として下さい。」

そして彼の偉大かつ荘厳なるアッラーに対するドゥアーには次のようなものもあります:

「アッラーよ、私を御赦し下さい。私にご慈悲をおかけ下さい。最高の同伴者の御許へと、私をお召し下さい。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は順境の時も逆境の時もアッラーに対して頻繁にドゥアーを捧げました。バドルの戦役時にはムスリムたちの勝利と多神崇拜者たちの敗走を願ってドゥアーし、その際には預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の両肩からマントが落ちるほどでした。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は自分自身や家族、教友やムスリムたちの為にドゥアーしていたのです。

訪問の最後に

これまでに預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のハディースや彼の偉大なる伝記、そして奮闘と苦難の数々を耳にした今、

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちから彼(預言者)に対して果たされるべきいくつかの権利を持ったこととなります。それは同時に私たちがそれを行うことによって、完全なる善行とまっすぐな道を歩むことにもなります。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)が彼のウンマ(共同体)に対して求める権利には以下のものがあります:

彼(預言者)の言行を真の信仰心をもって受け止め、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)にもたらされたもの全てを信じること。そして彼に従い、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に不服従であることを避けること。

また預言者の判断に依拠し、それを満足して受け入れること。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の判断に過不足のないようにすること。

そして全ての事柄に於いて彼(預言者)の言行に従い模範とすること。

また、預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対しての愛情が家族や財産、子供や全ての人々よりも優っていること。

預言者を尊敬して敬い、彼の教え(イスラーム)を擁護し、スンナ(慣行)に従い、それをムスリムたちは生活の中で実践すること。また預言者の名誉ある教友たちに対しての愛情を持ち、アッラーが彼等にご満悦されるよう求めて支持し彼等の伝記を読むことです。

そして預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対する愛情を示す手段の中には、彼(預言者)に対する祈願があります。

至高なるアッラーは仰せられました:

本当にアッラーと天使たちは、聖預言者を祝福する。信仰する者たちよ、あなたがたはかれを祝福し、(最大の)敬意を払って挨拶しなさい。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「実に、日々の中で最も好ましいのは(ジュムア)金曜日である。その日にはアダムが創造され、またその日に最後のラッパが吹かれる。そして叫び声が響き渡る。それゆえ、あなた方は私に対する祈願の数を増やしなさい。あなた方の祈願を私は受けることとなります。すると男は言いました:“アッラーのみ使いよ、あなたに対する私たちの祈願をどのようにして受け取るのですか?あなたの身体は侵蝕するのではないのですか?”すると預言者は言いました:“実にアッラーは大地に対して、預言者達の身体を蝕(むしば)むことを禁じたのだ。”」

ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のウンマ(共同体)にとって、この偉大なる預言者に対する権利について吝嗇であってはなりません。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「吝嗇な者とは、私の名を述べた時に私への祈願をしない者である。」

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「“集まりの場に座しても、そこにおいてアッラーの御名が唱えられることもなく、預言者に祝福も祈られないのなら、それは彼らにとって後悔の元である。もしかれ(アッラー)が御望みになれば罰せられ、もしかれ(アッラー)が御望みになれば許されるだろう。”」

別れ

私たちは信仰に満たされ、またウンマの従順さに基づいたこの(預言者の)家を立ち去ります。アッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は私たちに彼の慣行であるスンナを残されました。それは誰であれ救いを求める者に対しての教えであり、また導きを求める者に対しての正しい道なのです。

そして私たちは正しい先達の学者たちの出来事について、また彼らが如何に熱望してこの偉大なるスンナに従ったかを知ることが出来ます。願わくば、アッラーが私たちを彼等と同様、最善の方法をもって従う者としてくださいますように。

預言者のスンナに従ったイマーム(四大法学者の一人)アフマド・ブン・ハンバル(彼にアッラーのご慈悲あれ)は言いました:

「私はそれを実践しない限り、ハディースとして書き記したことは決してなかった」

ある日、私は預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)がカッピング(吸玉法)を行い、アブー・タイバに1ディーナールを支払ったことを知りました。その為、私はカッピング(吸玉法)を受けた時には1ディーナールを支払いました。

またアブドゥル＝ラフマーン・ブン・マフディーは言いました:

スフヤーンが次のように言うのを聞きました:「たとえ1度でもそれを実践しない限り、私はアッラーのみ使い(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)のハディースを伝えたりは決してしませんでした。」

ムスリム・ブン・ヤサールは言いました:

「私は靴を履いたまま礼拝を行いました。私にとって両方の靴を脱ぐことは容易な事でしたが、預言者のスンナを遂行する目的でそのようにしたのです。」

そして最後に敬愛なる兄弟に偉大なるハディースを紹介します。

預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)は言いました:

「私のウンマの者たちは、拒む者たちを除いてすべて天国に入る。」教友たち(彼等にアッラーのご満悦あれ)は驚いて言いました:「誰が拒む者なのですか？」彼(預言者)は言いました:「誰であれ、私に従う者は天国に入り、また誰であれ、私に従わない者は天国に入ることを拒まれるのである。」

アッラーよ、あなたの預言者(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)に対する愛情を私たちに授けて下さるよう願います。また彼(預言者)のまっすぐな道に従い、踏み迷うことも、踏み迷わせられることもないように願います。

アッラーよ、昼夜が繰り返し交替するよういつまでも預言者ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の上に平安がありますように。アッラーよ、善行者たちが彼(預言者)を思い起すように常に預言者ムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)の上に平安がありますように。

アッラーよ、私たちをムハンマド(彼にアッラーからの祝福と平安あれ)と共に天国の最高位であるフィルダウスに集めてくれるよう願います。そして私たちの目が彼(預言者)の姿を見ることによって安らぎ、また飲んだ者が決して喉の渇きを覚えることのない、預言者のハウドの水を私たちが飲めるよう願います。

私たちの預言者ムハンマドとその系譜、その教友全てにアッラーの祝福と平安がありますように。

